

---

# エンダ

日葵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エンダ

### 【Zコード】

N8274X

### 【作者名】

日葵

### 【あらすじ】

眼下に広がる異質な世界。

こんな世界にたつた一人で、一体何ができるというの？

こんな場所で倒れるわけにはいかない。私は・・・

(注) 残酷な描写は無い予定ですが、一応設定しました。

別サイトで同作品を掲載しております。現在8章まで掲載中です

(只今改訂中です)

一年程前から、自分の存在価値について考え込むようになった。もつと言えば、全てが虚しい。生きる価値を見出せない自分に気づく。

一番の原因・・・それは分かっている。二年前、突然襲った母の死。それからだ、全てが虚しくなったのは。亡き愛する人を思い出すのは辛い・・・それなのにふとした瞬間に母の事を思い出してしまう。

自宅のマンションで、缶ビールの蓋を開けた。アルコールの匂いが鼻に付くが、グイッと飲み干す。酒は強いほうだが、癖になると困るので飲むのは週一回と決めている。

『そんなルールを作っている時点で、もう駄目だつていうか・・・』

深い溜息を搔き消す様に、テレビからは延々と、騒々しい音が流れてくる。芸人が放つ言葉に、会場がワツと盛り上がりっていた。一体何がそんなに楽しいのだろうか・・・眉間に皺を寄せながら、チャンネルを変えるが、どこも同じような番組だ。特に意識して見ていい訳ではないが、テレビの音に感情が紛れる。こんな割り当てられた空間に一人で居ると、無性に堪らなく漠然とした不安が襲う。深く考えすぎると口クな事がない・・・そう考えて、無意識にテレビを付ける。そうやって何年も何回も過ごしてきた。

『前は・・・良かつたな・・・』

声に成らない言葉をグツと呑み込む。数年前は、家に帰れば母が居た。特に会話が無くても、得られたあの安心感や安らぎは、何物にも換え難い。

『一人になつて気づいても・・・なあ』

私の母は本当に苦労人だった。働かない父親のせいでの頃は、一日中働いている記憶しかない。貧しい幼少時代だったが、母の愛

に包まれて育つた私は、父の事だけが悩みの種で済んでいた。

母の記憶は、私の胸をこんなにも苦しくする。飲んでは暴力を振るう父親から、いつも守ってくれた母。無償の愛・・・母から受けたこの愛で、私はこの世界で生きる事が出来たのだ。父親が病気で亡くなつて、ようやつと親子二人で心穏やかに暮らす日々に、

「いよいよこれから、お母さんの人生だよ。やりたい事やりなよね」

そう言葉にする私に、

「今まで自分為に生きてきたわよ」

そつと笑う人だった。もつと伝えたい事は沢山あつたのに、三年前だ・・・あの日会社に掛かつてきた電話によつて、全てが一瞬で消え失せた。

【道に飛び出した子供を助けようとして・・・】

電話の声が耳に入らず、緊迫した声も遠くで聞こえた様な気がした。

はあ・・・もう三年も経つのに、一体いつになつたら、母の事を暖かい気持ちで思い出せるのだろうか。昨日まで話していた声が聞けなくなつて、大切な人が突然居なくなつて・・・寂しい。虚しくて堪らないのだ。私はこれから、寂しく長い人生を送しかない、そう思わずにはいられない。

今までは、どんなに居た堪れない気持ちに陥つても、帰れば母がいた。そこには、私が帰る場所が確かにあつた。それが当たり前だつたあの頃。一人じゃなかつた、あの頃。母の死後、私はこの都会でたつた一人だ。生きて行くだけの人生を送つていて。大げさと思われるかもしれないが、心の虚無感が私を負の感情へ押し流す。

それからの私は、

「孤独」

この言葉に、都度苛まれるよになつた。

勿論今の状況は、母の事だけが原因ではない。仕事、友人、恋

愛、結婚の事、全てにおいて将来の自分。女三十代。結婚の予定もない。あるとすれば、社歴だけが長くなる仕事だけだ。

生きていく以上は、どのような立場であろうと働かなければならぬ。それが社会だ、というか現実だ。実際、私の仕事は忙しいほうだと思う。毎日、毎年同じだ。数字の積み上げを行い、期限通りに仕事を上げなければならない。経理事務員として毎日二十一時位の帰宅時間となる。遅くも無いが早くも無く、そこから自分の為に何が出来るのだろうか？ そんな余力があるのなら、明日の仕事の為に取つておきたい位だ。

一体誰の為に、何のために走り続けているのか？ 誰かに教えてほしい。私がどこに向かっているのか。・・・馬鹿な自分、そう思い自嘲気味に笑つた。全ては自分が選択してきたくせに、と。

一本目の缶を開けて、ぼんやりと窓を見た。カーテンの隙間からは、暗い闇が見える。こんな空の下には、私みたいな人間はごまんといる筈だ。こうやって先の不安に押しつぶされそうな夜を過ごし、孤独を感じ必死に足搔く人間など腐る程居る筈なのに。何故這いあがれないのだろう・・・そして私は、何だ、何なんだ。そう自問しながら、今日も眠るのだ。

## 第1章 Usual spot -1(後書き)

第1章 Usual spotは主に主人公の女性の心の葛藤を書かせて頂きました。

少し重たい章になつておりますが、ここからストーリーが繋がつていくのかと思うと、今からドキドキしています。 それでは、楽しんで頂けるように日々精進致します。 宜しくお願い致します。

「今までなくてはいけませんか？」

私は声のトーンを落とし、眼前の上司を挑発しないように静かに問うた。しかしそんな気遣いは全て無駄に終わり、耳障りな声が響く。オフィスが広いせいもあり、声は全体に響き渡っている。その状況に、内心深い溜息を吐いた。

「当然だろーー！ 人を育てるのに、時期なんて関係ないと思うが？ 優秀な！ 優秀な人材にチャンスを与えるのは、会社の義務だ！！」

入社して数カ月ばかりの新人に、大きなプロジェクトを任せようという話だ。必要以上の怒涛に、思わず皆が振り返る。その視線を背中に感じながら、更に声のトーンを落としながら、

「はい。しかしプレッシャーで出社出来なくなつた社員も多数出ておりますし、出来れば後数カ月お待ち頂けたら、業務の内容も理解出来てよいと思いますが・・・。」

そこまで広くないフロアの中で、眼前的上司はテンションを上げるかの様に更に声を張り上げた。怒涛に近い罵声に、ある者は苦笑いをし、ある者は溜息交じりに外に出て、ある者は面白おかしく傍観している。

「はあー？ 君に聞いているのは、ただの確認なんだがねえ。彼らが持つていてる仕事を君が出来るかどうかをだ」

興奮している上司の声は、フロア全体に響き渡り、背中に感じる周囲の雰囲気は最悪だった。誰もが息を殺し、事の成り行きを見守つている。そんな皆の息遣いが聞こえてきそうで、嫌気がさす。会社がどう私を判断しているのか？ そんな事を、こんな場面で何故曝け出されなければならないのか。

『だったら最初からそう言えばいいのに・・・』

「私に、彼らの仕事を担当しようと・・・いうお話をどうつか？」

慣れている。こんなことは、今まで何度繰り返されてきたのだから。部内で新人の仕事だと認識されている仕事であっても・・・だ。本来ならば黙つて受けるべきだろう。

『でも、一体いつまで？？』

そんな心の葛藤を、見透かしたように口元を緩めながら、上司は言葉を続けた。

「そうだ。この部署に暇なのは君だけだろ？」

何がそんなに嬉しいのだろう・・・緩む口元を手で隠しながら、舐めるような眼で見上げてくる。

もつと業務的に伝えてくれたら、こんなに心が揺らされる事もないのに。上司はおもむろにデスクから、耳かきを取り出し、耳の穴を掃除し始めた。もうこれ以上話す気も無いのだろう。更に左手でパソコンのキーボード打ち付けている。

「・・・そうですか。・・・今担当している業務の事もありますし。少しお時間を頂いても宜しいでしょうか？」

そう、伝えるだけで精いっぱいだった。パチーン、パチーンと弾くキーボードの音がいやに耳に付く。恐らく今起きた状況を誰かに報告するのだろう。この上司は、そうやって自分の地位を確立してきた。社内では有名な話で、一人をターゲット絞り、徹底的に追い込む。その対象は必ず女性社員で、女性社員の離職率を上げたい会社の思惑だという声も噂される位だった。

席に戻った私は、パソコンを目の前にして、ゆっくりと息を吐いた。数年前から槍玉にあがつた私は、それでも会社に留まっている。四十近い女の転職がどれ程悲惨か分かっているつもりだ。それに・・・と呟く。

『私の誇りなんだ。今の仕事は』

そつ何度も心の中で呟いて、伝票に手を掛けた。

「はあ・・・」

その日の夜、行きつけのBARで、止まらない溜息に友人を付き合っていた。同じ会社で働く女性、沙織だ。営業の前線で戦っている沙織は強くて明るく、会社で一目置かれている存在だった。経理に所属しているとはいえ、全てがシステム化されている現在では、営業の彼女とは接点が無い。しかしプレゼン資料の経費の件で私は、

「ねえ、一度飲みに行かない？」

そう声を掛けられた。端正な顔立ちの沙織から、嬉しそうにジッと見つめられた私は、不毛にもドキドキした位だ。

「え？」

事務的に業務を伝えていた時に受けた突然の誘いに、正直面喰った。会社の女性社員達は、プライベートを重視する傾向がある。企画された飲み会にこそ参加するが、プライベートで飲みに行くなんて、ここ数年無かつた事だ。しかし誘いに乗つてみると、評判通りの女性だった。常に前向きでサバサバしてい・・・いつの日か心を許せる唯一の友人になっていた。上司から不当な扱いを受けた日は、どこからか聞き付け、「飲もうよ！」と誘ってくれる。それが単純に嬉しい。

「本当にどうしたいのかしらね、女を」

沙織はそう言つと、グラスのウイスキーに口を付けた。コハク色のグラスの中に、アイスボールが光を反射してキラリと光る。彼女のセリフは、何も私だけへの励ましではない。一年前に結婚した彼女は、大きなプロジェクトをあっさりと外された経験を持つ。営業でトップ三の結果を出し続ける、彼女に対する会社の期待は大きかった。女子社員の間では、結婚が過小評価の対象にならないのではないか？女性蔑視の傾向が強い、会社の転換材料になるのではと、ひ

そかに期待されていた。

しかし会社は、沙織をマネージャーから一般社員に降格させた。会社の言い分はこうだ。

「君には期待していたんだがねえ。結婚した以上、子供が出来る事を想定すると、会社はリスクを負つた訳だ。そこを理解してほしいね」

沙織は、ロックグラスをカタリと傾け、

「大体、あの人にはそんな権限あるの？ 部長に相談しなよ。絶対私的な意見だつて。毎日仕事もせずにインターネットをしているような奴よ。真に受けない方が良いつて！ もしあの男の行動が会社の命だつたとしても、屈する必要はないからね」

人の陰口を言わない彼女にしては、珍しい発言をする。勿論、私を気遣う優しさだった。今は沙織の優しさにどっぷりと甘えてしまう。

「会社は私をどうしたいのかな？ 勿論仕事は一生懸命やるよ。お金貰っているし。でもあんな言われ方をしなければいけない程、駄目なの？ 私。もうどうやっても、駄目の様な気がする。

・・・駄目だなあ、今のは愚痴だね。・・・うん、沙織の言う通り、仕事を頑張つていればいいよね。今の仕事、結構責任があつて遣り甲斐を感じているんだ」

心配そうに顔を向ける沙織にハッと気づき、気を取り直して笑つた。私の言葉に、少し安心した表情を浮かべながら、

「全然！！ 聞くつもりで誘つたんだもん。溜め込んだらダメよ！ いっぱい話しな

そう笑いながら、彼女はゆっくりと言葉を繋いだ。

「でも、ね。多分私、敢えて今のポジションを選択したの。会社の歯車として、頑張る事に限界を感じていたし・・・ね」

そんな選択もあるよと、ヤンワリと言つてくれている。

「そうだね・・・」

自分に聞きたい・・・私は、どうしたいの？ 一生働くことに不安が

ないと言えば嘘になるだろう。でも結婚の予定はないし、繰り返される生活に、劇的な転換期なんて訪れる筈もない。

『だから働いているの？ ううん、そうじゃない。生活の他に大事なものが仕事にある』

・・・私の存在価値というのだろうか。しかし、今ではその価値ですら見失いそうになる。昔は母がそんな存在だった。それが幸せだったのに。一体どうしてこんな事になってしまったのだろう。こんな出口のない、問答を一体いつまで繰り返すのだろうか？

そう思うと気持ちが沈むのだが、沙織に心配かけたくない一心で、沙織の言葉に微笑みを返す。目の前の優しい友は、こんなにも親身に心配してくれる。沙織が居るから、あんな会社でも頑張つていけるのだ・・・そう思ふと、グラスを一気に飲み干した。

「昔はもつと飲めたのに・・・ごめん」

「何言ってんの！ 今日付き合ってくれただけで、助かったよ。本当に楽しかった。スッキリしたしね！」

曰那さんに宜しく伝えてね

「ううん、私も一緒に飲みたかったし。また行こうね」

そう言って彼女は、彼女を待つ家族の元へ帰つて行くのだ。彼女の後姿を駅で見守りながら、改札に定期を覗した。沢山の人達が帰宅を急ぎ、私を何人も追い越して行く。帰宅時の電車の中は、平日の遅い時間だというのに結構混んでいた。ふと窓に映つた自分の顔を見ながら思う。

『歳・・・取つたな（疲れ皺が醜く感じて、思わず目を背けた）・・・最近、愚痴っぽくて嫌になる。沙織不快な想いをしていないかな・・・。』

この電車みたいに、私の人生の行き着く先が分かつていれば、こんなに不安に成る事もないのに・・・そんな下らない事を考える自分に嫌悪する。考えてどうするのだ。良い事なんて起こる筈もないのに。

一人の部屋に帰った私は、おもむろにテレビのチャンネルを入れた。何をする気力も起きない。ソファにしな垂れながら、脱力感にバタリと横になつた。テレビからは、自己啓発に勤しむ若者達の特集が組まれている。専門学校を卒業した私は、直ぐに今の会社に就職した。今では大学卒しか取らない会社だが、当時はバブルも後半という事もあり、何とか滑り込む事が出来たのだ。それからは、正にコツコツとただひたすらに仕事をしてきた。仲間達が退職していく中で、私はひたすら働いてきた。仕事のスキルを上げる為に、様々な資格も取得した。しかしそれが何になつているのだろう。テレビに映る未来ある姿が忍びなくなり、早々にベッドに横たわつた。今ではリストラの対象になりつつあり、上司の嫌味に付き合わされる日々。

『二十年近く・・・何だつたんだろう・・・』

こんな夜は何度なく過ごしてきたのに、今日の出来事は私の心を無性にかき乱す。そう・・・こんな夜は困る。この虚無感に結論が得出ず、抜け出せないループが辛い。私は深い溜息を吐いた。  
・・・寝よう。いつか変わる。変わらなくても、私の考えがいつか、変わるだろう。私の世の中にに対する矛盾が矛盾でなくなる日が来るから。そう、思いながら目を閉じた。

「やだあ。ホントに無理。暗あーー！」

クスクスと笑う声が、すぐ耳元で聞こえたような気がして、背中がゾクリと冷えた。

『今、何か聞こえなかつた？ まさか・・・』

私は一人暮らしだ。しかもここは、マンションの一室・・・現実的にこの声はあり得ない。思わず息が止まる。

・・・氣のせい？ そう思うのに、体がピクリとも動かせない。

少しでも動いてしまつたら、何がが終わつてしまいそつた気がした。横を向いたまま自分の心臓の高鳴りがやけに耳に付く。一瞬、静寂が広がり、暗闇だけが周辺に広がる。

・・・何も聞こえてこない、あるのは暗闇が故の静寂だけ。最近ネガティブな発想に陥りやすいせいか、幻聴まで聞こえる様になってしまったのだろうか。

「はあ！」

息を止めていた事すら忘れていた。

「大丈夫？ 私」

そんな自分に、思わず一人言を呴いた。そう言えば聞いた事がある。配管などを通つて、周辺の部屋の音が響く事があるつて。

「ふう」

やつと、呪縛から解き放たれたように、体を捻り天井を見上げた瞬間・・・淡く光る何かが目の前にいた。いや、浮いていたのだ。

「え・・・ちょ・・・」

この世界に不思議があるとすれば、こいつことかもしれない。光を発しているくせに、闇に対して照らす影響力は無いかのように、その場所だけが淡い光で包まれている。こんな時に何だが、幻想的で美しい・・・そんな事を思つたりもする。

どれ位の時間が過ぎただろう。

『・・・もしかしたら、光の屈折？』

そう思える程の長い時間が過ぎ、この奇妙な現象に、恐怖が遠のく錯覚に陥り始めていた。だからだろうか、思わず、そう思わず手を伸ばしてしまつた。あともう少しで、その淡い光に触れようとした瞬間、

「馬鹿なの？」

何の高揚もない、台詞のような言葉が、耳に届いた。

「ねえ・・・危機感ないの？」

相変わらず、球体は淡い光のままだつたが、言葉を発する物体に言

葉を無くす。・・・とうとう、私おかしくなつてしまつたのだろうか？会社はどうじょう。友人は悲しむだらうか？生活出来なくなつちやうな。あーきつと誰かに迷惑をかけてしまつ。こんな状況下で、漠然と考えながら、私はその光を見つめていた。

「危機感無い人間て怖いわね。今貴方は、この世界では考えられない状況に立たされている筈だけど・・・よく不用意に触ろうなんて気になるわね？ 何に対してもそう？」

幻聴まで・・・それにしても、これは私の中の声なのだろうか。だとすると、随分と容赦がない。

「そう・・・かもね」

その光は明らかに失望しているかのような声を上げた。あまりに流畅に会話が続くものだから、会話をする事に違和感が無くなつていく。

「貴方に言いたいのは、自分のルールが世界の常識つて思つてないかつて事よ。私のルールから言えば、未知数の物体に自ら触れる行為は自殺行為だと思うし、貴方がどっぷりと浸かつている絶望も、貴方だけのルールによつて作られていていうか、がんじがらめに縛られているように感じるけど？

そもそも、未知数の物体に安易に触れる行為が、この世界の常識だというのなら、私のがおかしい事になるけどね」

この物体の言葉は、至極当然だつた。通常であれば、恐怖が先に立つて触ろうなんて氣にもしないだろう。お酒が入つているせいなのかもしれないが、危機感が無いと言われば、その通りだ。しかし今は恐怖よりもこの物体の発する言葉に、気持ちが反応してしまふ。

「私が今の状況を作り出していくって？」

「そ、うよ。状況はどうにでもなるのに、周りが変わる事に期待するが故に生まれてくる、絶・望つてやつね」

グッと手に力がこもり、体全体にじんわり嫌な汗を搔く。こんなお決まりのセリフに、いちいち熱くなつてどうするのだ。どんな窮地

に追い込まれようとも、何度も自身をコントロールしてきた。そう思いながらも、今日の理不尽さを思い出すと、感情が先に立つ。

「つ・・・！ 私は、私のルールでこんな状態になつているわけじや、ない！ 確かに全て私が選んできたわけだけど、世の中には不可抗力で、どうにもならない事があるの！ 嫌なら辞めることも選択肢の一つだなんて、他人だから言える言葉よ！ 生きていかなきゃいけないのに・・・。私は、私の限られた資源の中で出来ることをやっているだけよ！」

激しく高鳴る心臓が、今にも爆発しそうだ。

光は、くつくつと笑いながら、上下に震え、そして・・・、

「ふつ！ あーははは。それって自分の中で使いならされた言葉？ そうやって自分に言い訳しながら生きてきたの？ もうー。ヤダ」

「

「・・・は？」

笑いを堪える必要がないと言わんばかりの態度に、この夢か妄想から一刻も早く覚めたかった。何故どうにもならない現状を、否定されなければならないのか。この声が自分自身としても、息をするのも苦しくなる程悔しくて仕方がない。可笑しくて仕方がないと言わんばかりに、光の玉は未だに上下に震えている様子を見て、屈辱から布団を頭から被った。

・・・寝よう。病気のことは、明日考えよう。明日の朝、このままだったら病院に行こう。これから的事も、明日ちゃんと考えよう。全ては明日だ。

「・・・」

部屋に静寂が訪れ、自分の息遣いしか聞こえてこない。布団の中で、少し息苦しさを感じながら、どうかこのまま寝てしまいたい。このまま光が消え失せて、私をかき乱す余計な事を言わないように、ただただ祈っていた。そんな私の願いも虚しく、

「ねえ・・・」

自分の心の声なのか、光は執拗に話し掛けてくる。

「この状態を無視して、寝てリセット出来るなんて思っている時点でおかしいでしょ？」

『違うー！ これは夢だから！』

微動だにしない私に向かって、淡々と言葉を繋ぐ光に、ジワリと嫌な汗をかく。こんな非現実をどう受け入れればいいのだろう。先

程の怒りの感情は通り過ぎ、今は明日から直面するであらう現実に、考えがまとまらない。

「・・・ふう。幻像でも、夢でもないわよ。私は」

布団をはぐ事も出来ず、それでも光の発する一言一句を逃さぬよう、全神経が言葉を追うのだ。一体、何がどうしてしまったのだ。

「大体、皆自分がおかしくなったか、夢かつて思うのよねえ。確かにこの世界では現実的ではないかもしないけど、全く他の発想は出来ないものかしら？ 自分達の世界が全てだと思っている、人間らしいと言えば人間らしいのかしらねー」

布団を上げる事も出来ずに、布団の中の暗闇を凝視し続ける。

『・・・やばい・・・。本気でやばい。現実逃避もここまで来ると、救い様が無いんじゃない？

これって日常生活が出来るレベルなのかな。どっちにしても、人に迷惑は掛けない様に・・・しなきや』

頼れる親戚なんて、知り合いなんていない。明日までこの状態が続くようであれば、正気の内に対策を取らなければ、真剣にそんな事を考えていた。

布団に包まつたまま、反応しない私にお構いなく光は語り続ける。私に言い聞かせる訳ではないかもしねれない。まるで独り言のように、ブツブツと呟いているのだ。

「そもそも、この生きにくい世界に固執して生き続ける理由はなに？ 生きとし生ける者が、純粹に生きている事が、自然の摂理ではないの？ 何故、生きているのか？ が、重要なのが理解出来ない。

考える事を与えられた人間の悲しいサガ？ 生きている事が一番重要ではないの？ その理由すら追及せずに。・・・一生自分は幸せではないと考え続けるの？」

光の問いかけに、ガバッと布団を剥ぐ。きちんと終わらせなれば、きっと朝までこの状態だ。明日は仕事だというのに、[冗談じや

ない。一睡もせずに仕事をするなんて、今の私には考えられないのだから・・・こんな状態に陥つても、明日の仕事の事が気になつてしまつ。根っからの仕事人間だと思うと苦笑いだ。私は光と対面し、私は無意識に大きな息を吐いた。

「私に、何が言いたいの？」

(続く)

光は相変わらず、鈍く光り続けている。

「提案があるの。貴方にとつては現実的ではない話をするけど」先程までの軽口が一切消え去り、急に声のトーンを落とし話し始めた。光から語られる内容は、夢の様な話で、現実離れした内容に、やはり夢なのか・・・そう感じざるを得ない。光の声だけが響く空間は、光と私だけが存在して居るかの様な錯覚を覚える。

いやにゅっくりと誘うその声は、底に沈んで行くようだった。地の底から響く様な、優しい母の声のような、逆らえない父の怒鳴り声のような、何とも表現する事が難しい。今まで聞いた事がない、音に堕ちて行く様で、足元が覚束ないよつて落ち着かない。

「短的に言ひナビ、この世界を捨てて、貴方の経験を活かせる世界に行つてみない?」

「・・・転職のお誘いな訳?」

敢えて言つてみたが、言葉にした事を後悔する程の冷やかさに、グツと言葉に詰まる。

「・・・生きていく場所を、ちょっとそこまで変えてなんて話ではないわね。

この世界、貴方が生きているという現実を捨てて・・・そうね、この世界で一度死んで、私が生きている世界に来てほしつて言つたら、分かる?」

光が発した「死ぬ」という言葉だけが、やけに現実的に感じて背中がゾクリと冷えた。状況的に簡単な話ではないと思つていたが、夢にしても妄想にしても「死ぬ」などと聞くと、ゾッとした。

『え? 死ぬ? えつ? 何故?? もしかして、やつぱりやばい状態? 何なの? いきなり死ぬなんて』

沢山の疑問が浮かんでは消える。緊張と恐怖のあまり、少し声が上

ずつているかもしぬれなかつたが、何とか声を絞り出し問うた。

「・・・死ぬのは困るよ、勿論」

「何故？」

何故困るのが、本当に理解出来ないと言わんばかりだ。いや、何故分からぬのか理解出来ない。「何故?」この言葉に迷いからではなく、あまりにも常識的な問いに、直ぐに答える事が出来ずについた。私の戸惑いなど何の障害にもならないと言つ様に、爆弾発言を放つ後でも変わらない声は、淡々と言葉を繋ぐ。

「あ～この世界では死ぬつて言つ事よ。死ぬといつても、別の場所で生きていくの。

そもそも、今でも何故生きているのか分からないのでしょうか？ 貴方はこんなに頑張つているのに。誰も貴方の価値に気付いていない。ということは、ここに貴方の場所は、ここではないのではないかしら。恐らく、どれだけ時間を経過したとしても、貴方が置かれた状況は変わらない。いいえ？ 年を重ねていく分、もつと生きていくことが辛くなるわね。だつて、周りが貴方の価値を分かつていらないんだもの？

辛いわよ。年を取つた後に、後悔しても遅いのよ。断言出来るわ、貴方は、何度でも絶望を、繰り返す。

いや、死んで別の場所つて・・・行つてどつするー！ そう突っ込みを入れてはみるが、光の言葉に思わず「ゴクリ」と息を飲んだ。今の状態よりも悪くなつていてる・・将来の私。あまりにもハッキリ断言するものだから、予言の様に脳内に響く。

「・・・そんなこと、分からぬでしょ・・・？」

・・・フフフ

まだ分からぬの？ そう言わんばかりに、光は侮蔑した失笑を発する。

「分かるわ。貴方は、数年前も同じ悩みを抱えていたわ。ただ今と違うのは、まだ将来に対して希望を持っていた事。多少若かったから。何事も経験だと思っていたのではなかつたかしら。ま、仕事

だけではなく全てに、おいてね。

ほら、現に現状は悪くなっているじゃない？ 何にも変わっていないわ

光は、一切私への気遣いを排除し、一方的に捲し立てた。そして「現状は悪化している」と言い放った後、一時の静寂が訪れた。私の思考は、今や目まぐるしく動きまくり、心臓は痛い位に高鳴り、息をするのも苦しい。断る言葉が即答出来ないのは、光が発した先ほどの言葉によつて、押さえつけられているからだ。

『・・・そうだったな』

認めたくない、そう頭では強がつてみても、心は激しく動搖していった。確かにそうなのだ。少し状況は変わつていて、今と差ほど変化がない悩みを抱えていた。変わりたくても、変われない自分。自分の現状は・・・悪くなる一方だということ。

「変わりたくないの？？」

そんな言葉に、グッと体に力がこもる。この光は、私の思考が読めるのではないか？　冷静にならうとする私の心を、ピンポイントで搔き乱す。

「・・・変わる？」

思わず光が発する言葉を、復唱してしまった自分が悲しい。何故、聞いてしまうのか？　この異様さは明らかなのに。私の反応に感触を得たのか、高揚したような口調に変化しつつある。

「ええ。それは勿論保障するわ！　私の世界は、一〇〇%実力世界だもの。この矛盾した世の中よりも、随分シンプルよ。

貴方達は、私の世界でいう英雄なの。世界の民は、貴方達をエンダと慕い、尊敬し、崇めている。こんなちっぽけな世界での貴方の絶望なんて、取るに足らないものよ」

「具体的に何をするの？」

光は私の言葉に強い感触を示し、興奮して居る様に見えて、私の心が警鐘を鳴らした。「危険だ」と。この状況下で興奮している自分がいる事は否定出来ない、と同時に冷静に分析をしようと躍起になつてている事も事実だった。

「・・・私の世界の民を救つてほしいの」

その光は、つい前までの饒舌が嘘かのように、隨分と言葉を選択しながら話を進め始めた。

「今、私の世界は、今にも滅んでしまいそうな程、危機に瀕しているわ。罪もない、弱者が苦しんでいる。この状況を打破する事ができる救世主を、世界の民は探している。

・・・貴方だつたら出来ると思ったの。だから、タブーを犯してこの世界にやつて来た」

光の言葉は、私の心を熱くする。私だからこそ出来る何がある

らしい。しかし、その症状を恥じながら、私は冷静に、冷静にと自分の心を諫める。

「あのね・・・私に何が出来るの？ 私には特別な力も、人並み以上の腕力も、知性もないわよ。もつと言えば、もう四〇歳も近いおばさんなの。この世の中には、もつと貴方が望む能力を持つた相応しい人がいると思うけど？」

・・・そう、私に何が出来るのだ。この世の中さえもままならないといつうのに。言葉にしてみて改めて思う。こんな私に何が出来るというのだ。しかも「死んで」行くという。そんな事は出来ない。ここまで考えて、自分の発想に可笑しくなった。

『これは夢なのに。若しくは、私の現実逃避なのに、眞面目に・・・

#### ・馬鹿みたい

私が、こう答えるのを待っていたかの様に、光は間髪入れずに答えた。夢だと思いながら、夢にしてはリアルな展開に、心の中でブツブツと分析を続ける。どうしても私でなければならない理由が見つからないのだ。

「この世界の常識なんて、何一つ関係ない！ 年齢も、能力も、何もかも超越して人間の資質だけで戦える世界なの」  
更に強い口調でその光はこう言い放つた。

「だからこそ、私は貴方を選んだ。人として、常識のある貴方に託してみたいの！ だつてそれが、私達の世界にとつて絶対無二の強さになるから」

分かつている。分かつているのだ。この光は、私の一番弱い部分を見越して言っている事位。こう伝えれば私が反応する事を見切っている。目的は分かったものじゃない。それに、それは人として正しいのか？ ・・・ そう思っているのに、何かが変わる・・・ そう考える自分がいる。

・・・ それでも、私の中の声が、本当にそれでいいの？ そう問うのだ。

「この世界を中途半端に逃げ出して、次の世界で上手く生きていける  
筈が無い、と。

「死んで生まれ変わりたいと思えるほど、自分が不幸だとも思え  
ない。悪いけど、他をあたって」「馬鹿な私……」この世界から逃げ出していくのである。仕事だって、  
私だから出来ている事があるはずよ。こんな事、絶対あっちゃいけないよ。いくら夢だとしても、そんな事に希望を持つちゃ駄目だ。  
そう、今までの人生や友達全てを投げ出していい筈なんて、ない。  
・・・これが私の妄想でなければの話だ。

少しの沈黙後、光は怒りを爆発させる訳でもなく、抑揚のない声  
で呟く。

「ふ・・・ん、そう? また、来るわ」

光がそう告げた瞬間、部屋の中は漆黒の闇が広がり、そこには隣の  
住民のテレビの音だけが、低く響いていた。

パソコンにデータを打ち込みながら、昨日の夜の事を思い返していた。気もそぞろになり、何度もバックスペースキーを押す。

『夢・・・』

いや、夢にしてはリアルで生々しい。何度も「変な夢を見た」と思おうとしても、光の一言ひとことが、頭から拭う事が出来ずにはいる。こんなに鮮明に覚えているなんて、未だ嘗て体現した事がなかつた。でも・・・と思う。

【自分の世界を救つて欲しい】

そんな本やゲームの中の話・・・正気の沙汰ではない。本気で病んでしまつたのかと思うのだが、目が覚めたら全てがいつも通りだつた。しかし、病気の人間は一様にそう思うのではないだろうか？

『・・・どうしよう、病院に行くべき?..』

「はあー

無意識に溜息を吐いた。周りの雑踏が、遠い場所から聞こえてくるような感覚に陥る。気が重い。気持ちだけがやけに高揚して、反動でとても疲れた感じに良く似ている。朝からずっとこの思考のループに陥つていた。

『今すぐ帰りたい・・・』

目頭を押さえながら、けだるくパソコンに目を向ける。先程からちつとも仕事が進んでいない。積まれた書類に目を向けて、溜息混じりに手を伸ばしたその時、右下から社内メールが浮かんだ。

【お疲れ様】

『え、沙織?』

今日は朝から外回りだと言つていたのに、社内に居る事に驚いた。

【おはよう。 朝見かけたら、何だか疲れているかなって感じたよ~大丈夫? 昨日飲みすぎちゃった?】

彼女の優しさが、文面から滲み出でていて、いつもより何倍も嬉しい。

『それなのに、自分の中の声なんかに心乱されて馬鹿だ、私。私つてば・・・単に寂しかっただけなんじやない?』

そう思ひうと恥ずかしさに顔が熱くなる。

【昨日はお疲れ様。 実は昨日、変な体験をして】

いけない。本当におかしくなつたつて思われちゃう。一気にデリートキーで削除をしながら、何とか無難な文章を打ち込んでみる。

【昨日はお疲れ様。あれ~外回りは??

愚痴が多くなつてしまつたけど 楽しかったね。 聞いてくれてありがとう~! すつきりしちゃつた。

疲れてる? そんな事ないよ。でも、昨日少し飲みすぎちゃつたのかな? 夢見が悪くて(へへ) でも、大丈夫。

気にかけてくれてありがとう~】

・・・送信、と。夢見が悪いという事にした。私、大丈夫だよね。

「ふー」と一息ついた時、彼女からのメールが浮かび上がってきた。返信が早い! 夢見が悪いなんて書いたから、心配してくれているのだろう。心配させた事を詫びながらも、心穏やかにメールに目を移す。

【外回りだつたんだけど、急遽予定変更になつたの。

ふふふ。その夢見の話聞きたいな。一緒にランチしようよ~】

沙織の存在は、自分は孤独じゃないと気づかせてくれる。今日の朝、普通に目覚めて良かつた・・・仕事に来る事が出来て良かつた。そして、そう思えて良かつた。腕時計に目をやると、後一時間足らずでランチの時間だ。つい先程まで、中々手が出なかつた書類の束に手を掛けた。

『一時間あつたら終わるわね。よし、ランチを楽しめるようこ、

頑張つて終わらせちやお~!

最近忙しかったから、少し疲れていたのかもね  
そう思うと、心なしかキーボードを弾く指先が、軽くなるのを感じた。

沙織の言葉に、微笑みを堪えながら、ランチの了承メールを飛ばした。

『あはは。大した夢じやないって。でも、ありがとうー。じゃ、パスタ行く？ ほら、この前行つた（^ - ^） じゃお皿にね』

送信、と。思わず二ンマリ口元が緩む。

「あら、何だかご機嫌ですねえ～」

同じフロアの後輩が声を掛けてきた。

「え？ そう？」

データを打ち込む手を止めて、上司からの視線を阻むように背を向け応対する。こんな場面を良く思つ上司ではないからだ。少しでも長く話そぐものなら「給料泥棒かね。就業時間中は、集中してほしいものだがね。」なんていう声が飛んでくる。当たり前の注意だと思つてゐるが、今日はこれ以上の気遣いは出来ない、そう考えての対応策だった。

「忙しいけど、もうすぐこの仕事が終わりそうだからかな」

そう答えるながら、朝のセットにどの位の時間を要しているのか想像も出来ない、完璧な風貌に少し見とれながら笑つた。

「そうなんですかあ～？」

後輩は大きな瞳を更に大きくしながら、髪をクルクルと指で回しそうと耳打ちをする。

「昨日の・・・あれ。気にしない方がいいですよ。あの粘着質つて、もう病氣ですから、ね？ みんな言つていますよ。嫌がらせだって」

この会社の女性社員だからこそ、分かる暗黙の空気が流れる。私は、小刻みに頷いた。

「じゃあ～」

そう言いながら、後輩は屈託のない笑顔で微笑み、その場を後にし

た。彼女の言葉は、私に対する嫌みではない。

これが会社の現状だ。この会社の女性社員は、希望をもつて入社した時から、長い年月を掛けて、少しずつ仕事を諦め、この会社に期待する事を止める。先程声を掛けってきた後輩も、入社当時は会社の在り方に随分と会社に警鐘を鳴らし、戦っていた一人だった。しかし、

「これ以上会社の方針に納得できないのであれば、部署移動も…」

そんな会社の声に、女性社員は落胆し諦める。だから、それぞれが方向修正を行っていくのだ。ある者はプライベートに。ある者は結婚に。ある者は外の世界へ可能性を求めて、会社を辞めていく。女性蔑視だと叫ぶ前にやる事があるので？と思いつ時期もあった。しかし、会社全体に根付いた覆らない現状に、皆の思考は止まるのだ。私は、どこにも行けなかつた。社会人として与えられた仕事、そしてそれ以上の可能性を信じて、疑問を繰り返しながら、方向転換が出来ずここまで来たのだ。

これ以上考えてはいけない。ここで、私は思考を止めた。

「で？ どんな夢だつたのよ？」

ゴルゴンゾーラのパスタを口に運んでいた私に、沙織は嬉しそうに聞いてきた。

会社の近くの洋食店で、既に店内は一杯だ。私たちは十一時丁度にダッシュををして、何とか席を確保出来た。必死に走ったものだから、到着した時には息切れがひどく一人で笑つた。スペゲティはとても美味しく、沙織との会話は楽しくて、朝の憂鬱な気持ちを、あつという間に払拭してくれる。

「何でそんな嬉しそうなのよ？」

私は話したい衝動を何とか抑え、ニヤニヤ笑う沙織に問う。

「だって、夢見が悪いって言つてている割にすつきりした顔をしているじゃない？ 実は素敵な夢だつたのかしら？ って思つてね。

ねえ？ ホントに夢の話～？？

もぐもぐと口を動かしながら、それは貴方の気遣いが嬉しいからなのに・・・そう暖かい気持ちになつて自然と笑みが零れる。

沙織の言葉に背中を押された気持ちに成り、

「昨日の今日でそんな事、ある訳ないじゃない！

うーん、あのね～ ・・・ 笑うよ。絶対。人の夢を聞きたがるなんて、変な人～」

まだ話してもいいのに、嬉しそうに笑う沙織を見ながら、絶対笑われると確信した。私はかなり用心深く、内容をかなりオブラーートに包んで、あたかも夢だったかのように（実際夢だったと思うのだが）昨日の夜の事を話した。

「で？ その光から自分の世界を救つてくれって言われたって？」私の言葉を復唱しながら、沙織はポカンと私を見ている。私は波立つ心臓を必死に隠しながら、とぼけた顔で彼女を見る。

「ねえ？ 変な夢でしょ？？ 何だか可笑しくなっちゃって」

沙織は、止まっていた手を思い出した様に動かしながら、スペゲティをパクリと一口頬張った。モグモグする口を押さえながら、今にも吹き出しそうな顔をしている。

「ん、もう！ 何の願望よ？ 勇者に成っちゃうの？」

二人、「無いって！ そもそも成れないって！」て言つたが、無理だから！ あはは！」と噴き出した。

「なーんだ。何とも思つていなかつた人が夢に出てきて、好きつてことに気付いたの・・・なーんていう甘〜い展開を期待していたのにい。ツマンナイ！」

沙織の想像力の豊かさに、思わず笑いが出てしまう。

「言つたじやん、変な夢だつて。そもそも、一体なんの妄想よ。さすがに、それはないんじやない？」

完全否定する私の言葉に、

「分からぬじやない？ 駄目よ～自分から否定したら、夢にも出ないからね」

そう言いながら、沙織は少しプツと頬を膨らませ、悪戯げに笑った。

私は、そんな彼女を見て、ホッと体の力が抜けた。

『なーんだ、やっぱり夢だつたんだ』

いつもの日常に、自然とそう思えた。そうか、そういう風に笑い飛ばしてほしかつたのか・・・。

「午後は？ 外出なの？」

「ううーん。 そうだねえ。 予定はあつたけど、今日は会社にいる予定。 事務処理が溜まつてて。 いい加減マネージャーから怒られそう」

食後の「コーヒー」を飲みながら、ふうと彼女は溜息を吐く。 私はお昼が終了する二十分前の時間が大好きだった。 明るい午後の光と他愛無い会話が、どうしてこんなに楽しいのだろう。

「ふーん。 一日外出していると仕事が溜まつて大変だねえ」

「いえいえ、 一日パソコンと向き合っている方が無理ですから！」

「だから、 事務処理溜まるんでしょ？？」

「違いない！」

店を出る頃には、朝とは打つて変わって、晴れ晴れとした歩みで部署に向かった。

昼食から戻つた私は、先程までの幸せな気持ちと相反した状況に追いやられていた。

「少し時間、いいかね？」

上司がさも愉快だと言わんばかりに、一タ一タと笑いながら肩を叩いて来たのだ。いつもであれば、長々と自席で小言を言つタイプなのに、あえて会議室を指定してきた時、嫌な予感が過つた。

広い会議室に一人が向かい合つて座ると、圧迫される空氣に気持ちが淀む。そんな空氣すらも楽しむ様に、上司は長い前置きを置きながら言葉を繋いだ。

「それでねえ。君に、会社からお願ひがあつてねえ」

上司の猫なで声を聞いた瞬間、後頭部から背中にゾワッとした感覚が流れた。もつたいくびりながら、あのねえ、でねえと繰り返していく。

「庶務に欠員が出てねえ。ほら庶務つて仕事は地味だけどさあ、やる事いっぱいあるじゃない？ だって、社員が働きやすい状況を作るのが仕事でしょ？？」

「・・・・・あの、それで・・・？」

この後の展開は、聞かずとも分かる。上司の言葉を待つまでも無く、私の脳裏には様々な思いが駆け巡る。

『・・・庶務？でも、まさか？ 部に私がいなくなつたら？ いなかつたら？』

出世をする道はなくとも、それは会社の方針だからと思つていた。私の存在は、認められていると、認められている筈だと思って頑張つてきたのだ。目の前の男は目を細めながら、嬉しそうに薄ら笑いを続いている。言葉を発せない私に向かつて、トドメを刺す様に大きく身を乗り出す。

「ふう。だからねえ、長く経理で実績を積んでもらつた君に、今度は庶務で活躍してほしいと思っているのだよ」

・・・その経験を活かす仕事が庶務課にあるとは思えない。いや、庶務の仕事がどうと言う訳ではない。会社に無駄な仕事はない。会社に所属している以上、異動は当然視野に入れておくべきだろう。会社は組織なのだから・・・そう思つてはいるのに、思考は拒絶を続ける。

『分かつている。分かつているけど！ 今の部署で頑張ってきた。・・・それが唯一、この会社にいる理由だった。それだけを支えに、仕事に取り組んで来た。それだけが、私の誇りで。それだけが、私の希望で・・・』

(庶務課は、長年勤めてきた女性社員の、最後に行き着く場所と言われている場所だ。評価は厳しく、社内の不満の捌け口。会社がこの部署に辞令を出すときは、リストラ勧告と同じだといわれている部署。またの名を、「不要島」。忌み嫌われる部署だと言われている。ここに異動を命じられた社員は、それだけで退職を決意する程の部署だった。)

この会社に勤めてきて、初めてじわりと目頭が熱くなつた。しかし寸で、その感情を押し殺す。この人の前で泣きたくない、その一心で何とかその一線を越えずに済んでいた。

「課長、私の・・・仕事は？」

「あー。君はもうその事は心配しなくていいよ。僕が見るから。大体さあ、君少し立場をわきまえて発言したまえよ。この前だって、僕が分かつていらないような発言なんてして、僕の立場ないじゃない？ まあったく！ 飛ばされても文句言えないよねえ。見てる人は見てるっていうかさあ。

だいたいさ～長年勤めているからって、勘違いしていないかね？

仕事は年数じゃないよね、どれだけ仕事に対して誠意と責任を持

つてやるかでしょー？ 自分の専売特許です～みたいな顔してもらつても、会社として迷惑つていうか、そんな会社の迷惑、分かつてる？ そんな・・・

どこかの自己啓発の本を読みあげる様な言葉は、私の中に何一つ入つて来なかつた。

『「この前の報復？ そんな理由で？』

「自分が、全体を把握しているなんて思つていい訳？ そんな訳ないよね。マニユアルが徹底されているこの「この時世」に。誰でも出来るつての。あんな仕事。

自分が特別なんて思つて仕事されると迷惑だ」

私を飛ばす理由をずらすらと並べ、課長は捲くし立ててくる。ガランとした会議室に、上司だけの声が響き、頭の中で木霊するような錯覚を覚える。

「おっしゃられてる意味が、分かりません」

こつなると、手がつけられない。でも、言わずにいられない。勿論仕事で、彼の事を馬鹿にした態度を取つたつもりは無い。チームの事を思い、経験からくる助言だと思つていた。そんな風に思われてしまつていたのかと思うと、もつ自分の全てが否定されたような気がして、自分がこの場に居る事自体が不思議でならなかつた。

私の言葉がカンに障つたのか、フーフーと荒い息を吐きながら、こう上司は吐き捨てた。

「ていうか、も、明日からうちの課に来なくていいから。荷物まとめて、とつとと庶務に行つてよ」

この言葉に、今まで我慢してきた感情が、一気に沸点まで到達しそして弾けた。何なのだ、この状況は。

「その言葉は、会社の「」判断ですか？ 部長に確認をせて頂いても宜しいのでしょうか！」

私の剣幕に、切り札と言わんばかりに、ニタリと笑う。

「ふう、当たり前だろ。会社からの辞令だよ。君に対するね。あ

くまで僕は、代弁者だけど？」

そう言い放つた。

『え・・・？』

底の見えない地底へ、一気に突き落とされた・・・そう感じた。これが会社の判断だつて？ 意も言われぬ、虚無感が襲う。

何故？ 何故に、長年頑張ってきた私に？ ここまで仕打ちつて何なの？ 誰にでも出来る・・・そんなことは分かっている。

『ふ・・・リストラ対象者は、皆一様にそう思うか・・・』

突き付けられた現実に、何だかもう、どうでもよくなつてきた。窓から差す午後の暖かい日差しですら、私の気持ちの慰めにもならぬ。廊下から聞こえる雑踏が、別の世界の音のように聞こえて来る。仕事も、会社も、この上司も、怒りも、悲しみも、どうでもいい。さすがに、ジワリとくる感情を抑えきれなくなる。あーもう耐えられない。いつその事、辞めてしまおうか。考へていなかつた訳ではない。今の生活は出来なくなるかもしねりないが、今以上の屈辱があるだろうか？

今までの自分を思つと、可笑しいのか、悲しいのか、何故か全てが混じり合い、自虐的に少し笑つた。

その刹那、突如昨日の光が現れた。

「え」

あまりの衝撃で動けない私に、その光は氣だるそうに単調な声で、含わせてこの状況が当たり前と言わんばかりに告げる。

「さあ、どうするの？ 昨日はあせつて台無しにしちゃうと元も子もないから、一回引き下がつたけど、正直あなたに付いているのも飽きちゃつた。何とか扉は開かれたし、もう強引にでも連れて行くわ」

「何故・・・ここに？」

光の先に居る上司に向けると、こんな状態にも関わらず、にやにやと締らない顔をしている。

『私・・・しか見えていないの？ やっぱり私がおかしく・・・』  
絶望の淵に立たされる思いで、もう一度目を落した時、上司の異変に気付いた。確かに笑いながら座っているのだが、明らかに人間のそれらしくない。人間はこんな風に、不自然に存在する事が出来るのだろうか。

一瞬、突然の光の出現に、驚いて動作が止まっているのかと思つたが、全てが一瞬にして画像として切り取られたようだつた。半開きの口、そして今では焦点が定まっていない目。正に蠍人形そのものだ。

『な・・・何？ 何が起きているの！』

あまりの非現実的な光景に、思わず叫ぶ。理解の範疇を超える状況に、ゴクリと息を飲んだ。

「何なのよ！ 私がおかしいの？ 何故私なのよー」

「もう、本当に面倒くさい・・・この女」

私の叫びに、ブツブツと言葉を繋ぐ。

「あ～うざい。たく、こっちの人間は、何故にそう考えすぎるのかしら？ もう少し、シンプルにしてくれない？ 面倒だわ。それとも、自分の世界の常識以外を、受け入れるキヤバが少なすぎるのかしら。

はあ・・・本当に理解不能。あんたである理由は、昨日伝えたわ。ま、もつと言うと、子供だと死ぬ事を現実に捉えられなくて、すぐ死んじやうって事かしら」

光の玉は私の存在など、どうでもいいというかのように、元の世界に戻れるなんて夢を見る。大人も同じようなものだけど、

「どうでもいいから。

物事の道理が分かる前から育てても良いのだけど、そんな時間も無いしね。じゃ～どうしようかなって考えた時、大人に目を付けたつて訳）。人間って人生が半分を過ぎると、漠然と命は永遠ではない事を認識する様になるのよねえ。・・・それに、特にあんた、もうこの世界にいる人間じゃない？ 通常は成功者が選ばれるけど、あんたに限っては、この理由しかないって」

「あ・・・の、どうするつもり？」

「全く！ 思った以上に時間が掛かったわ。最悪最低な状況に追い込まれても、何かしら活路を見出したりして・・・本当に、冗談じゃないわよ。本当に厄介な人間。

私だって、もつといい人材に当たりたいじゃない！」

私の質問なんて耳に入つていないようだ。明らかに私に対する不満にゾクリと背筋が凍る。意味は理解出来ないが、昨日とは、全く異なる状況である事だけは明らかだった。こんな場所に突然出てきたのも、状況が切迫している様に感じる。

『扉が開いたって何！？』

さすがにもう夢だとは、思えなくなってきた。何よりも、この状況は異常だ。

思わず後ずさりをした瞬間、光から鋭く何かが伸びて手を掴んだ。

「いやっ！」

そのまま今まで味わった事が無い程の力で、グッと吊るし上げられた。余りにも強い力のせいで、掴まれた手首から血の気が引き、思わず唸る。何とか振り解くべく、手を掴んでいるものに目を移した時、思わず目を疑つた。

それは手だった。しかし、只の手では無い。私の手を掴んでいる手？

・・・え、これは骨？

「言つたでしょ。あなたが生きている現実を捨ててって。あはは。」

あ～はははははは！！

光の感情は今や沸点に達したかのように、甲高い高笑い繰り返す。この異常な状況に、恐怖のあまり動く事も話す事も出来ない私に、その光はこう繋げる。

「死にたくなつた訳ではないみたいだぞ・・・でも、未練もないでしょ？」

そんな恐ろしい言葉と同時に、グイッと光に引き寄せられた。光だけで、他は何も見えない。見えない事が救いとすら思える。

「痛！！」

更に腕をねじ上げられ、骸骨の手は今や目の前まで迫っていた。もう、私の存在なんてさほど重要では無いと言わんばかりに、自分自身に言い聞かせるように言葉を繋げる。

「もう、私は十分待つたわよね？ 多少強引でも、もう構わないわ。

そもそも、貴方が良い理由なんて知らないわよ。私が聞きたい位だわ。

ネガティブでえ、力も無いくせに正義感だけが存在価値で？ 正

しい事をしていれば幸せになれるつて思つてゐる馬鹿な生き物。正に暗いつたら。なのに、何の努力もしない上に、全てにおいて中途半端で。

今までスカウトしてきた中で、一番つまらない人種。それなのに、あんた、また頑張るつもりでいたでしょ？ 我慢出来なくなつたわ、いい加減。

何とか扉は開かれたし、あんたの意志なんて、どーでも良いの。強引にでも、連れて行く、わ！！

掴まれた手に、更に力がこもる。

「私、本当にあんたが嫌い。あの世界で、さつさと、のたれ死になさい。」

悪意が籠る言葉と声に、体から汗がドッと噴出した。自分自身に何が起きているのも理解出来ない。理解出来ないが、昨日とは打って変わつて危険な状況である事は確かで、生まれて初めて「死」というものを、強く実感する状況に追い込まれている・・・それだけは理解出来た。

ギャハハハ！！！

さも愉快だと言わんばかりに、光が笑う様に、目を背ける事が出来ず直視してしまう。死ぬ恐怖よりも何倍もこの光が怖い。更に締め上げられ血の気が引き、もう駄目だと意識が朦朧とした時だつた。

バン！！

その刹那、会議室のドアが、勢いよく開かれた。驚いて振り返ると、颯爽と入ってきたのは、誰でも無い、沙織だつた。

「沙織！？」

知った顔に、思わず叫ぶ。いや、ここは会社だ。誰が会議室に入つても、おかしくはない。しかし、こんな不可解な状況に、知つた人間が現れる事に驚いた。使用中なのを知らなくて、入つてきただろうか。

「逃げて！」

私は、無我夢中で沙織に向かつて叫んでいた。彼女をこんな狂つた状況に、巻き込みたくない！光の後ろに蠍人形の様に存在している上司の様になつてしまつたら！

「何だかおかしいの！だから！」

それでも沙織は、何事もないかのように、ゆっくりと近づいて・・・そう思った瞬間、私と骸骨の手を振りほどいていた。その行動はあまりにも速く、一瞬何が起こつたのか、動く事が出来なかつた位だ。しかし一番驚いたのは、光の主だつたかもしぬない。一瞬沈黙が流れ、

「えつ？ は？ なに？ あんたなんなの？」

動搖する声が響く。沙織に手を引かれるままに、今まで私達がドアから抜けようとした時に、

「な！ てめえ！ 何者だあーーー！」

耳につく怒涛が、割れんばかりに響き渡つた。その後、空気を振らす衝撃が、私達の髪先を突き抜けた。揺れる髪に違和感を覚え、思わず振り返つた先には・・・つい先程通り過ぎた場所が、音も無く抉られている光景が広がつていて。それは正に一瞬にして、豆腐を押し潰したように、ただその空間だけがぽつかり壊れていたのだ。

「はつ・・・?」

言葉にならない。何が起きているのだ。一体、昨日から何が変わってしまったのだというのだろう。

「走れ！」

沙織の声に反応して、無意識に足が前に進んだ。沙織は私の手を引いて、中央のエレベーターを目指し、廊下を駆け抜ける。毎日沢山の人に行き来する通路なのに、誰一人として会わない。扉の向こうに広がるはずのオフィスにも、人の気配を全く感じない。

何故私と沙織が、こんな状態で、ここにいるんだろう。

「どこに行くの！？」

エレベーターに乗り込むと、一階のボタンを押し、続けて「閉」のボタンを押す沙織に思わず叫んでいた。目の前の廊下に向かつて目を見開き、ボタンを押し続ける沙織の目線を追つた時、あの「手」が目前に迫つていた。骸骨の手だけが、私を捕まえんと骨だけの指を広げ、私達を追いかけてくる。

「ちよ！ 止まれ！！ ふざけんなよ！！ てめえ！！」

伸ばされた手に、『捕まつてしまふ！』恐怖に思わず目を瞑つた瞬間、エレベーターの扉が閉じた。体に感じる降下感。状況の変化についていけず、息が上がる。

「あ・・・」

問い合わせようとした私の言葉を遮り、沙織は言った。怖い位のまつすぐな目に、この異常な状態が現実であると思い知らされる。姿かたちは沙織なのに、醸し出す雰囲気は、全く面影を感じさせない。

とてつもない威圧感を感じる。

「契約は結ばれた。貴方は、もうこの世界に留まる事は出来ない。決めなければならぬ」

「沙織……？　……貴方、誰？」

沙織はそこで一度、一息置き言つた。

「New Worldに先導する案内役を選択するのだ。私が、先程の骸骨の手か」

私は、思わず沙織の腕を握り締め……その自身の手を見て、今自分が大きく震えている事に気付いた。

「わ、私は何も契約なんて」

心臓の高鳴りで、声が上手く出ない。沙織は強い視線を投げたきり、微動だにしない。

「そうだろう。しかしあいつは、貴方の強い失望感を利用して、強引に扉を開けてしまった。

もう時間が無い。手短に言おう。貴方の精神は肉体から引き離され、この狭間の世界のみ存在している。この場所は、New World の扉が開いている間だけ開かれる。もう幾分もしない内に消滅する。・・・このエレベーターが下に着くまでに決めなければならぬ

「死んだの？ 私・・・」

行きたくないって言いたいのに、一切の拒絶を許さない物言いに、それだけが言葉として口から出た。滴り落ちる涙は、こんなに熱いのに。

「あの光が現れた瞬間に、貴方はあの男の前で倒れた。本来は、この世界との決別を本人が強く望まないと開かれない扉が、貴方を絶望に導く事で強引にこじ開けたのだ。

そのお陰で、開いた扉の衝撃を辿り、私はここに来る事が出来たのだ。お昼に貴方の話を聞いて、目を離さないようにしてていたのだが・

・・・巧妙に隠されてしまった」

体中の血が逆流したかのように、カーと熱くなつた。その時の光景が目に浮かぶ。慌てふためく上司と、左遷を言い渡されてショック

で倒れた私。

「もう、この世界には戻つて来られないの？」

「・・・その希望だけは捨てるのだ。もう貴方はこの世界の所有物ではない」

二人の間に、沈黙が広がつた。暫しの間二人は、エレベーターが降下する階数を目で追う。三階のランプが付いた。もう一度沙織を見たが、不動のまま何も言ってこない。沙織ですから、味方ではないのかも知れない。当然の様に、この世界との決別を口にするのだから。

戻りたい・・・つい先程までの日常に。それでも、でも分からないけど、もうこれしかないのでしょ？ 誰と行くかですって？ 心の中で降下する階数を数えた。一階、一階・・・ふーと大きな息を吸つた。

「行くわ。貴方と」

(第2章 終わり)

強風が女の体を揺らした。外気の冷たさが、体に吹きつける風が、否応が無しに体の自由を奪つていく。

「な・・・え？」

『ついたきまで、エレベーターの中にいた筈・・・なのに?』混乱する思考を何とか整理しようと躍起になる。しかし現実味がない状況に、混乱し困惑し、思考回路が止まつた。もう一度、周りの風景に目を向ける。

「ここ・・・どこ?」

どこまでも続く広大な土地、うつそうと続く深い緑の森、巨大な山脈が連なつてゐる。空には雲が立ち込め、灰色の世界がどこまでも続いていた。

『一体どこまでが現実なの?』

そびえ立つ山脈とほぼ同じ高さに浮いてゐる自分。風で息苦しく、今や女の体は、バサバサと風に振られる木の葉の様だ。たまらず隣の沙織の腕を掴んだ・・・筈であつた。触れた感触に、激しい違和感を覚え体が固まつた。想像していたそれとあまりに違つていたのだ。

受けた衝撃に女はそれを直視し、それも女を静かに見つめていた。

『・・・な、これは何?』

目の前の異質な何かは、明らかに人間ではない。しかし、地球のどちらとも違う。

身丈は三メートル位あるだろつか。人間の手に当たるであろう部分は、足のつま先に当たるほど長い。首は飛びだし、顔の半分以上もあるうかという裂けた巨大な口。ギロリとした大きな目は金色に鈍く光り、獣の様に縦に黒い瞳孔が入つていて。それだけでも倒れそうな程の衝撃なのに、この生物は静かに、そして厳かに世界の序章を告げる。

「この世界に来たならば、これから起らるであろう事を全て受け入れることだ。貴方の常識はここでは通用しない。

しかし、受け入れなければ・・・そう、決して希望を失つてはならない。何を聞いたかは知らないが、貴方がこの世界に必要なことは確かなのだから。自分がやるべきことを探し出し、その為だけに生きていくのだ

『しゃべる・・・ん、だ?』

「あ・・・貴方と一緒に?」

どこまで受け入れればいいのか分からぬまま、女は生きて行く為に問うた。しかし一時置いた後に、

「・・・この世界に来たエンダに同行者はいない。基本、初めは一人だ。我々先導者がエンダと会う事は二度とない。」

この回答は、女を失望させるのに十分だった。日本という安全な国で、何不自由なく生きてきたのだ。今、こんな世界に放り出されたら、それこそ直ぐにでも死んでしまう。

「ちよつ! 待つて。こんな場所で、一人で? 言語は? 生活の糧は? こんな私に何が出来るの? 私に望むことは何?」

すがるような気持ちで問う女に、縁の生き物は淡々と答えた。

「矛盾に感じるかもしれないが、エンダ個々に望む事は何もない。この世界で死なずに、生きる事だけだ・・・道は既に作られている」

「既について・・・どの様に? あの骸骨は、この世界の人々を救つてほしいって言つていたわ。何かあるから、他の世界から私を連れてきたのでしょうか? どうすれば良いの? 教えて! 何を目的にして生きていけば・・・」

何とか喰い下がる女の言葉を、無情にも打ち碎く声が響く。

「今、全てを伝えることは出来ない。貴方が自分で気づかなければ、この世界に来た眞の理由は解読出来ない。・・・何故今日とう日が訪れたのか、分かる日が必ず来るだろう。今は、ただ生きることだけを考える事だ。そうでなければ、今日にでも貴方は死ぬ」

田の前の生き物は、女に質問の余地を与えない。しかし「死ぬ」その言葉だけが、脳裏に何度も木霊する。

『死ぬって・・・そんな世界だつたなんて・・・?』

「時間がない。今から始まりの地に連れて行く。初期のエンダが、

生きて行くのに最適な場所だ。そこから、状況を整えて・・・」何一つ納得する言葉を得られずに、話が矢継ぎ早に進んでいく事に、女はどうする事も出来ずについた。しかし刹那、沙織の事を思い出したのだ。

「さ、沙織は？ 無事なんでしょうね！？ 沙織に何かしたら・・・！」

『私・・・自分の事ばかりで！！・・・何かしたら・・・こんな生き物を目の前にして、何が出来つていうの？ こんなに震えは止まらなくて、異常な世界で体一つで生きている私に。』

・・・でも何が起きているのか全く理解は出来ないけど、私のせい

で沙織に何かあつたら！』

沙織を思うと、生きた心地がしない。女の言葉に、金色の瞳をジッと向けてその生き物は静かに答えた。

「問題は無い。我々は、直接あなた方の世界の人間に危害を加える事は出来ない。時々あの人間を通じて、貴方の情報を収集させてもらっていた。あの人間を媒体に出来たのも、狭間の世界が開かれたあの瞬間だけだ。あの光に包まれた骸骨も、貴方があの世界に居なければ何の手出しも出来ない。勿論私が近づく事も不可能だ。

あの人間の貴方に対する慈しみが、私をあの場に導いた』

今この瞬間だけは、女は恐怖を忘れて田の前の生物にジッと田を向けた。一〇〇%信じた訳ではない。しかし自分を案じる沙織の優しさは、信じられる。そしてこの生き物にそう言わしめた沙織を思うと、目頭がグッと熱くなつた。田の前の生き物の瞳の奥を読み取る事など到底不可能だが、見た目の得体の知れなさとは裏腹に、自分を導いてくれた行動を思い返し、漠然と、本当に漠然と、

『信じても良いのだろうか？』

そう思い始めた。

「探した」

その時、別の声がした。この声には聞き覚えがある。一番受け入れがたい声が響き、女の体がビクリと揺れた。

『夢なら覚めて！』

恐る恐る声の方向を振り返ると、目の前には山と見間違つほどの巨体がそびえ立つていた。

「え・・・」

隣の生き物の比では無い。女の世界では存在しない生物に茫然と立ち竦む。その女の前に、スツと縁の生き物が立ちはだかり、体格の違いに怯むことなく飄々と言葉を繋ぐ。

「ほお・・・よくこの場所が探し出せたものだ」

巨体の生き物は、噴き出す怒りを何とか押さえ込み、

「・・・接点地點を血眼になつて探したわ。広い世界だからって、ゆつくり構えてんじやないよ。こーの盗人があ！！」

感情が一気に沸点に到達する様に、語尾が大気を揺らす。手だけの骸骨は、今や身丈が一〇メートルもあるうかという巨体と化し、上半身が骸骨、下半身が馬の様な風貌に変わつていた。声を発していれる部分が顔なのだが、鋭利な牙・・・ここからの位置では、それしか見ることが出来ない。

『光の正体はこれだつたの！？』

手だけの骸骨の正体に、ガクリと膝が折れペタリと座り込んだ（と言つても、空の上で不安定この上ない）。目の前に立つ縁の生き物が、普通に見えてしまう程禍々しい姿だ。

「この女をこの世界に連れてくるだけに、どれだけの時間要したと思う？ 扉を開くまでに五年よ？ 色々な手回しを重ねて（ここで何かを思い出したか様に、ギヤハハと笑つた）、やあつと開いたというのにい？ それを横から？ 冗談じやないよ！」

「ドン！――

言葉が終わると同時に、一瞬にして爆音と業火が渦巻く様に襲いかかってきた。世界を全て飲み込みそうな炎に、女はギュッと目を閉じる。

『死ぬんだ・・・私』

「目を開くのだ。これから先、如何なる苦難に立ち向かおうとも、見開いた目を閉じてはいけない。全てを見届け、己の進むべき道を見間違わない為に」

轟音に紛れて、緑の生き物の淡々とした声が切れ切れに聞こえてきた。その声に導かれる様に、目を見開いた時、一瞬心地よい風が吹いた。

「てめえ」

骸骨が黒煙を口からブスブス吐き、怒りにその身を震わせる。

緑の生き物と女を守つたのは、光の壁と見間違わんばかりの巨大な盾だった。莊厳な音と共に光の盾が出現し、幻想的な光景が広がつていた。業火は盾にその行く手をばかれ、散り散りに消えつつある。

『今の何・・・炎？ 盾？ ・・・どうやって出したの？』

目の前で繰り広げられる現実を受け入れきれない。

「その攻撃・・・この者を殺す気か？」

「てめえ、何者だ・・・」

全てを燃やしつくしたと確信していたのだろう。予想を反した結果に緊張感が漂う。

「どれだけの時間を有したとしても、この世界に来る者は、自らが扉を開けなければならない。だがしかし、お前は・・・この世界の秩序を破つたのだ」

何者にも屈しない強い尊厳を保ちながら、緑の生き物は淡々と答えた。

「チツジョー？ てめえ、霸騎王の関係の者か？ 古いしきたり

に縛られて、この世界を壊そうとした悪の権現。・・・ないな、全て滅んだはずだ。

そもそも、やり方がなんだって？ 正義も悪もねえよ？ 行き着く場所は一つだ。問題は、誰が連れてきたかだ。

ちなみに、こいつは駄目だ。絶対明日にでも死ぬね。別に捨て置いてもいいけど、こいつ殺さなきゃ気が済まない…！」

骸骨は、発した言葉と同時に巨大な爪を振り落した。緑の生き物同様、女を捕らえた！！！ そう骸骨が「ニヤリ」と笑った瞬間、二人の姿は一瞬にして消えた。

「クソガ～！！！」

女が体を掴まれたと認識した瞬間、体に強いGがかかった。体が押しつぶされる感覚に目がくらみ、今にも気を失いそうだ。受ける風圧で目を開ける事もままならない。

『あの骸骨から、逃げているの？』

最悪の状況に追い込まれていてる筈なのに、何故か先程の骸骨の言葉がやけに耳に残る。

『扉を開くまでに五年・・・？』

【この女をこの世界に連れてくるだけに、どれだけの時間要したと思う？ 閉扉を開くまでに五年よ？ 色々な手回しを重ねて、やあつと開いたというのにい？】

『骸骨の手が、私を連れてくるのに五年を要した・・・？ 五年・・・？ 色々な手回しして・・・・・え？ ・・・・え？』

嫌な汗がジワリと全身から噴出す。「と、止めて」 そう、思わず声に出した瞬間だった。更に全体に強い衝撃が襲う。・・・ そう感じた瞬間、女は緑の手から投げ出されていた。女は見た。天地の様を。そして緑の生き物が、自分からずつと離れた場所から落下していくのを。

女の意識は、ここで途絶えた。

「うう・・・」

女は、冷たい土の感触、そして直接肌に触れる外気の寒さに目が覚めた。

軋む体を何とか起こし、周りを見渡す。先程の一体の生物の気配はどこもなく、あるのは見渡す限り無残にひび割れた枯れた土地だけだ。

「頭・・・痛い・・・」

まともらない意識を何とか集中しようとするのだが、脳が考える事を拒否している。加えて頭が割れそうな程、痛い。

『寒い・・・』

身を刺すような寒さだった。今まで体現した事の無い気候に、身も心も凍りつく。寒いはずだ。女が纏っている物と言えば、肌着と、薄い皮のワンピース。そして、薄い革靴。それだけだった。何故か女は、これだけの装備で荒れ地に一人置き去りにされていたのだ。あれほどの高さから落下して、何故無事なのだろうか。混沌とする意識の中で、女は必死に何かを思い出そうとして足搔く。思い出そうとする端先から、記憶がこぼれ落ちていく感覚。ガシガシと額を搔いた。

『思い出せ！ 思い出さなければ。大事な事が、忘れていけない事があった筈。私は何故ここに・・・私がここにいる、理由。理由・・・？』

「お母さん・・・」

女が思わず唸る。自分が発した言葉に、頬を涙が伝い、

「お母さん・・・」

フリリと立ち上がり、どことなしに歩き始めた。ゴツゴツとした地面が、薄い足裏の皮に食い込む、

『痛い・・・寒い・・・。』

この広い空の下、どこに進むべき道がどこなのか分からぬ。しかし自分の何かが警鐘を鳴らす。ここにいたら確実に死ぬぞと、死にたくなかつたら歩くのだと。心の声に従い、重たい体を引きずる様に歩き続ける。冷たい外気と、鋭い風が女の肌を突き刺していく。

「お母さん・・・お母さん・・・お母さん・・・」

思考はほぼ停止していた。意識して咳いている言葉では無い。しかし女は、咳のを諦めない。何があつても、この単語だけは忘れてはならない、零れ落ちる記憶の奥に刻み込まれている。

ズルズル・・・。何日歩き続けただろう。革靴は既に原形を留めない程ボロボロになり、靴底はかるうじて薄皮で繋がっているばかりだ。原形を留めていなるのは何も服だけではない。そこには嘗て女性であつた面影すらなく、瘦せこけ全身が雨風や埃で真っ黒な女の姿がある。

寒い、痛い・・・もうそんな痛覚すら女にはない。状況は一向に良くならず、更に悪化するばかりだ。強風が吹き荒れれば、一〇〇メートル進むだけでも一時間以上かかる事もあつた（あくまで感覚だが・・・）。明確な意志や目的があつた訳ではない。歩かなければ・・・生きなければ・・・生きて確認しなければならない。その意識だけが、女を歩かせていた。

ズルツ、ズルツ足を引きずりながら、その歩く音だけがひたすら耳に入つてくる。ズルツ、ズルツこのテンポを崩してはならない。少しでも歩く事を辞めたら、もう一步も歩くことは出来ない。一步一歩ずつ歩き続ける。

荒野には、更に冷たく厳しい大気が吹き荒れた。杖の代わりとして枯れ木を持つ手も、当の昔に無い。朦朧とする意識の中で、『歩かなければ、止まるな、足を前に、前に・・・』 そう何度も呟いた事が。

しかし女に限界が来た。動けない。もう何時間も後一步が踏み出せずにいる。

『あと後一步・・・あと一步・・・あと一步・・・後一步・・・』

朦朧とする意識の中で、目の前に広がる荒れ地を見続けた。もう、

涙も出ない、声すら出ない。見渡す限り、生き物の気配もない。

『お母さん・・・』

そこで、女の意識は途切れた。

ドドドドドドツツドオオ！

地響きを轟かせ、一頭の巨大な生き物が荒れ地を駆け抜けていた。これが獰猛な種類の生き物であることは一目瞭然で、興奮している口元からは止めどなく涎が滴り落ちている。また血走ったその深紅の眼は、どこを見ているのは計り知れない。毛が短く、剥き出しの黒々とした皮膚が、この生き物の獰猛さを否応が無しに際立たせていた。

この世界の獣は、人を襲つた事があるか否かの一種類に分けられる。ひと度人間を襲えば、その額に宝玉が浮かび上がり、明確な意思を持ち人を襲う様になるのだ。この獣の額にも、その宝玉が怪しげな赤い光が爛々と湛えていた。

名を「ギヴソン」といい、身の丈が人間の三倍はあるうかという生き物である（ギヴソンという名は、人間達が付けた通り名だ）。勿論、人に慣れる生き物ではない。赤い目をギョロギョロさせながら、何もない荒れ地をひたすら駆けていた。

しかしそのギヴソンに跨つているのは人間であり、手綱を悠々と操りながら目的地へ誘導している。随分ガタイが良い男で、背中には自分と同じ身丈程の剣を携えていた。ごついゴーグルでその表情は読み取る事が出来ない。

「フフーン」

乗り心地は決して良い方ではないだろう。しかし、そんな事は感じさせない位、終始安定した走りだ。

この走りは勿論、ギヴソンの意志ではない。この獣は、隙あらばと、この憎たらしい人間を振り落とそうとしていたし、屈辱的行為を虐げる人間を、今すぐにでも喰らってやると思巻いていた。しかし、どうやっても自分の願いは敵わない。認めたくないが、自分の

力を遙かに上回っている。

「くん？」

その人間に肩にちょこんと腰掛けっていた小動物が、少し鳴いた。毛は長く、少し長めの耳と、大きな目、そしてフサフサの尻尾。この男には似つかわしくない可愛い生き物だ。全身で風を受けながら、正面右の遙か地平線を見ている。大きな目には、荒れた地しか映つていなかと思われた。しかし、更に大きく見開かれた目に映つたものは・・・、

「くんっくっくくくく」

止まれと言わんばかりに、この小動物は男に向かつて吠えた。しかし男は気付かない。小動物は、一生懸命頬を体で押した。頬に当たる柔らかい毛並みに、驚き男は問うた。

「えええー？ 何ですか、タロチャン！」

めつたに見せない可愛らしい行為に、男のテンションは一気に上がる。

「・・・  
ガブツ！！

「ギヤ！ いつ痛つだ――――！」

思いつきり耳を齧られ、あまりの痛さに思わず手綱を引く。砂埃を立てながら、ギヴソンはしぶしぶ従い、走りを止めた。

男は涙目で耳を擦りながら、

「タロ！ 何すんの！ いきなり噛むなって言つてんだろーが！  
いや、噛むなっての」

野太いでかい声で、タロと呼ばれた小動物を怒鳴った。しかしタロは、男の様子など氣にも留めていないかの様に（実際、全く気にしていない）、ある方向に目線を移した。耳を押えながら、タロの視線に合わせた。

「なんだあ？ あらあ？」

枯れた灰色の世界に、薄ぼんやりとした光が見えた。こんな荒野に、

光り輝く光？ 場所は少し離れているようだが、ギヴソンを走らせれば一〇分位で着きそうな距離だ。一刻も早く一つ田の海を越えたかつたが、

「へへつ。面白そうじやねーか！」

そう悪戯っぽく笑うと、思いつきりギヴソンの脇腹を蹴り上げた。その衝撃で狂ったように、ギヴソンは走り出す。

「ん~ど~だ？」

その光は、少しずつ発光を弱め、か細くなり靄のようになしか見えない。この広い荒れ地だ。光が消えたら、まずその場所を見つける事は不可能だ。しかし左肩の小動物には、まだその光がはっきり見えているようだつた。一点だけを見つめ、微動だにしない。・・・この世界の生き物にしか分からぬ何か・・・か？ そう男は感じた。

「お前が頼りだぜ！」

強く手綱を握りしめ、男は叫んだ。タロは小さく「くそつ」と小さく鳴いた。

ガゴン！

男はギヴソンの手綱を地中深く突き刺した。無駄な足掻きをするギヴソンを横目に、田の前の汚いぼろ雑巾に田を移す。

「たくよ~」

男がその場所に到着した場所には、光の代わりにぼろ雑巾が打ち捨てられていた。正直こんなにショボい結果にならうとは、考えてもみなかつた。この世界らしく、冒険の扉が開いているかと思つたのに。

「こらあなんだ？ 布？ ・・・服う？ ちえ、せつかく来たつてんのに、無駄足とはね～ あ？」

さてと・・・と、踵を返し立ち去りとした時、布の切れ間から、人間の掌と思しきものが見えた。

「あゝ人間か？何でこんな所に？」

ぼろ雑巾と見間違う程、肌も血色はなく枝の様だった。男は周りをグルリと見渡すが、仲間らしき人影はあるか、生き物の気配すらない。それもそうだろう。この荒地は果てしなく広く、旅人は敢えて遠回りをしてまで避ける場所だ。

この世界は広い・・・安住の地を持たずにして暮らす人間達の中に、死に対する尊厳が薄い人間達も居る。

「あー死んで捨てられたか？・・・しょうがねえ。埋めてやるか」

一旦上げた視線を落とすと、タロがぼろ雑巾の頬らしき所をペロペロと舐めている。その可愛らしい仕草に、

「おーい、腹こわすぞ。つたく、何お前、そんな可愛い行為も出来んの？ 知らなかつたんですけど？」

そう口頃の恨み節を聞かせながら、ひょいと持ち上げると、「・・・え？」

微かだが、「ピクツ」と体が動いたのだ。意識はないが、微かに息使いを感じる。その様子を見届け、タロがぴょんと肩に乗つた。早く行けと言わんばかりに、グイグイと男の頬を押す。・・・決して、じやれている訳ではない。そして、それは男も良く分かつていた。

「え、何？ 連れて行くの？ 何で？」

タロが早く行けと言わんばかりに催促をするが、あからさまに受け入れがたい表情を浮かべ、

「いや、あのホント〜に嫌なんですけど」

そう訴えてみる。この世界の人間を捨ててどうするのだ。仮に回復したとして、その後の対応に困る。ジリジリと後ずさる男に、痺れをきらしたタロが、大きく口を開けてガブリと耳を噛んだ。

「・・うぎや！－ 痛つてー・・・ あんな、お前捨うのと訳違うんだって！」

男は深い溜息をついたが、タロの催促に諦めたのかそのボロを肩に

乗せた。そして、怒りを剥き出しにしたギヴソンに踵を返す。

「よつしやつ！　帰るか！」

グッと手綱を引き上げて、ギヴソンの背中に飛び乗った。

『暖かい・・・』

『甘い・・・?』

女は深い意識の底から、浮き上がるよつにスーと目を覚ました。

『一二二・・・どこ・・・?』

全く思考回路が働かない。自分の意識で動かせる目だけを、左右上下に移してみる。ふとシンプルな天井の木目が目に映った。

『部屋の・・・中? 何故、こんな所に・・・』

荒野と打って変わった状況に困惑しながらも、自分が柔らかい布団に包まれている事に気づく。羽毛の様な軽さと温かさに、全身で幸せを噛みしめる（ただの綿の布団だったが、女にとっては至上の幸福だった）。

『布団・・・何で・・・柔らかいの?』

体は鉛の様に重く、起き上がる事すら出来ないが、何とか状況だけは掴みたくて躍起になった。自分が何故ここに居るのか理解出来ないまま、荒野とは比べ物にならない位の安全な世界に、気持ちが焦つて仕方がない。

「目え、覚めたか?」

突然、野太い声が左手方向から聞こえてきた。自分以外の存在に（こんな場所に居て何だか）、ビクリと心臓が跳ねる。自身に受けた衝撃で、グラッと目の前が歪んだ。何とか目だけ向けると、

「おらつ、食え。てか、舐めろ」

女の反応など微塵も期待していない物言いで、強引にスプーンが口に押しつけられてきた。

『誰?』

随分と大きな男だ。虚ろな目に飛び込んできたのは、シャツの上からでも分かる鍛えられた筋肉。「ゴシゴシとした手、武骨に生えた髭・

・・陽に焼けた肌。

「にんげん・・・」

女は虚ろに呟いた。

押しつけられたスプーンから、トロツとした甘い液体が口の中に流れ込む。何日も食物を入れていない胃に、ゆっくりと染み込む優しい甘さ。深い眠りに落ちそうな虚ろな意識が、突然クリアになつた。

「お前エンダだつたんだな。だつたらこれは、地球でいう蜂蜜みたいなもんだ。体力を回復する効果がある。食えるだけ、今は食つとけよ」

『蜂蜜か・・・そうだな。この味はそうだ。あれ？ はちみつつてなんだっけ？』

懐かしい様な、そんな物は知らない様な・・・頭と心がちぐはぐな感覚に陥る。そんな女の様子を、じつと見ていた男が問うた。

「お前え、名前は？」

『なまえ・・・なまえ・・・?』

初めは名前という単語すら認識出来ずに、女はキヨトンと男を見た。何日も声を発していなかつたからか、上手く言葉を発する事が出来ない。喉で声が詰まり、「コホツとむせてしまつ。

「ナマエ・・・なまえは・・・」

思い出せない。記憶がシャツフルされてしまつたかのように、上手く組み立てられずにいる。何故、ここにいるのだろう。この人は誰？ そもそも、私は何なのだ。思わず片手で額を押さえる。なまえすら思い出せない自分に、混乱してしまう。あれ？ なまえって何だっけ？

こんなこと、今まで一度も体験した事がない・・・ない？ そうなの？ それすらも分からない。

大きな影が目の前を横切つた。

バチン！

その時、女の体に衝撃が走った。初めて会つた筈の男から、両頬を掌で弾かれたのだ。痛みはない。痛みはないが、ハツとした。男は掌を女の頬に乗せたまま、真剣な眼差しで女に問うた。その声は決して荒くはなく、ただただ真剣だつた。

「おいつ！ しつかりしろ。名前だよ！ なーまーえー。お前は誰だ？」

いいか!? ここで忘れたら、一生思い出せなくなるんだ。思い出せ！ 俺らにひとつては、あの世界から来たつて事は絶対に忘れちゃなんねえ。自分のルーツだけは、忘れちゃいけねえよ。いいか？ 荒野からゆづくり遡るんだ。

何で、一人でんな所に倒れていたんだ？ 何で、一人で荒野に居たんだ？」

そこまで言つと、ジッと女に視線を向けた。男の迫力に押される様に、必死に記憶を辿り、そして、一番近くにある記憶を掴み取つた。  
「なぜ・・・荒野に？ ・・・そうだ、もう一步も歩けなかつた。そこで、記憶途切れ。そう、ひたすら歩いていたから。・・・何日も、枯れた土ばかりの広大な土地を、行けども歩いた。途中、砂嵐に巻き込まれたり、豪雨に降られたり・・・時には、水たまりの水すら飲んだ。その水たまりも直ぐに口上がつてしまつたけど。・・・  
・考へてみたら、あの雨が無かつたら私死んでいたかもしれない・・・」

混沌とする意識の中で、止めどない記憶が口から溢れてくる。そんな様子を、男は何も言わず見つめていた。

「そうだ・・・目が覚めたらあの荒野にいたんだ。だつて私、空から投げ・・出され・・・・て」

そこまで辿つた時、突如女の目から涙が溢れ出した。『何故・・・忘れるなんて・・・』大事な記憶を忘れかけていた事実に驚愕し、そして思い出せた事に安堵の気持ちが溢れる。

『思い出した。何故自分が、この不可思議な世界にいるのか？

何故、荒野を彷徨っていたのか、歩き続ける理由は何だつたか。何故、全てが受け入れない事ばかりなのか』

・・・言葉にならなかつた。女の頬に涙が一通り流れ落ちた時、『つい男の掌が両頬をグーと押した。そして豪快に白い歯を見せて、ニカツと笑つた。

「んで、あんた名前は?」

この男は何なのだ。女は、涙と荒野を歩いた汚れでくしゃくしゃの顔になりながら、押されてタロのようになつた顔で呟く。

「ハル・・・」

声が続かない。男は名前を聞くと、更に太陽みたいに笑つた。口コロと表情が変わる男だ。人間らしい・・・女はぼんやりと思った。

「そつかー! ハル。俺はゲン、元だ。んで、こいつは、タロ」一つの間にか元の肩に乗りながら、ハルの顔を覗き込む小動物をして言つた。タロと呼ばれた小動物は、元の腕を伝いハルの肩まで降りると、涙に濡れた頬をペロペロ舐めてくれた。

『慰めてくれて・・・いるのかな?』

動物の温かな体温を感じるこの瞬間が、奇跡の様だ。頬を包む元の掌の大きく優しい掌が、荒み固まつた心をゆっくりと溶かす。

その後、ハルの頬を押し続ける元の手の甲を、思いつきタロが噛んだ・・・その様子に、ハルは薄く笑う。

この世界で、まだ死なずに生きている。この数日間、願う事すら罪だつた感情と情景に、涙が溢れて止まらなかつた。

ハルが元に助けられて、数日が経とうとしていた。宿泊している宿から一步外に出ると、外の日差しの暖かさを全身で受けて、柔らかい土の感触に人知れず感動を覚える。宿からは、エンダと呼ばれる人々の笑い声が響き、何とも平穏な日々。元が言うには、各地にこのような宿が沢山あり、基本エンダは宿を渡り歩きながら生活をするらしい。

「エンダは一箇所に留まれねえからな」

『元の言葉は、どのような意味を持つのだろう・・・』

そう言う元の表情は、読み取れない感情を含んでいた。ハルの体調が万全ではない為、元は込み入った話を極力避けていて、真意は分からぬ。

「精神的なものも、回復に影響が出ちまうからな」

ハルは体調が良くなると、宿の周りを散策する様にしていた。落ちている体力を何とか改善しようと想えていての事だが、直ぐに疲れが出てしまい、寝込む事も多い。

宿の周辺は木々が切れる場所で、湖には暖かな日差しが降り注いでいる、何とも穏やかな場所だ。宿の周りには、所々に小さい花が咲き、鳥がさえずり、時々魚が水面を跳ねる音が聞こえてくる。

「灰色の世界かと思っていた・・・」

自分が数日前まで置かれていた現状を思えば、この世界の何と美しい事か・・・しかし、今のハルには、空も、空気もそして生き物ですら、何もかもが常識では図れない。別世界から来た事を考えれば当然だらう。

そう、まずこの空。強い日差しの太陽と、熱を感じさせない大きな星がいくつも空にあり（空の色が青かつた事は救いだった）、その大半は何故か、空の色に透けていた。深く広がる綺麗な青い空な

のに・・・何故、こんなに窮屈な感覚に陥るのだろう。

「これだけは、慣れそうもないな・・・」

宿から少し離れた、見晴らしの良い場所に繫がっている獣・・・ギブソンに目を向ける。四肢を鎖で繫がれているのに、暴れているのだろう。獣の周りは、無残にも地表が露わになつていた。元に近寄るなど言われている獣は、先程からジッと自分を伺っている。大人しくしているように見えるが、滝のように流れている涎、奥底に怪しく赤く光る眼を見る限りでは、自分をどう思っているのか、手に取るよう分かるのだった。

そもそも、何なのだ。この常識外れの大きさは？ この見て取れる狂暴性は。これ程の生き物、見た事がない。そんな生き物が、こんな住居近くに繫がれて？ 飼われて？ いいものか？

ハルはもう一度、空を見上げ、そうしてフウと浅い溜息を吐いた。でも、本当に異質なのは自分自身だろう？ と自嘲する。足のつま先、そして手の平、爪の先まで見た。目に映った枯れ木の様な体に、笑いすら出てしまう。荒野を歩き続けたからなのか、この世界に来たばかりの「低スキル者」だからなのか、骨と皮だけの体。いつ折れてもおかしくない位の弱々しさ。

そして、この体 자체が自分自身ではない事実。世界の基準がずれているのかもしないが、身長が一〇〇cm程縮んだように感じる。身長だけではない。痩せこけてという次元を超えて、日本風の顔が少し彫が深くなっているし、髪の毛も腰程の長さになり、太い黒髪が柔らかい少しシルバーが入った栗色を湛えている。

『全くの別人だ。気持ち悪い・・・。これには、何の意味があるのだろう』

外見が変わるのは、正直本位ではない。こんな異世界に来たとしても、私は私なのだと思ったかつた。

棒きれのような手を見ながら、ハルはグッと掌を握り締めた。

その時、

「ちえ、あいつら頗くて寝てらんねえや。エンドになつたばかりで、浮かれてやがる。

・・・おいつ、あんま無理すんな？　万全じゃないと疲れるからな。ここは」

元が宿の入口からノソッと出て来て、声を掛けってきた。元が現れた途端、獣が発する殺気が少しばかり小さくなつた様に思う。

『あんな獣を従えるなんて、一体どれ位強いのかな・・・』

フツと可笑しくなつた。「強い」が基準になるなんて・・・。そんな事を思つていると、元の足元からハルの肩を目指してタロが走り寄ってきた。スルルと体を上り、チヨコソと肩に乗り、ハルの頬にスリスリと体を擦り寄せてくる。

「タロ」

タロの陽だまりのような匂いに、ハルは目を細めながらも声を押し殺して呟く。

「寝てばかりもいられない。早く体力をつけて・・・早く「始まりの地」に行かなければ」

元に言つた訳ではない、自分自身に言つたのだ。この動かない体が、何とも歯がゆい。いつまで経つても回復しない体力に、辟易する。

『こんな場所で、のんびりしている場合じゃないのに・・・!』

目の前の頑固な女に、元は深い溜息を吐いた。何度も何度も、この女に言い聞かせてきた。この世界では、低スキルの人間にとつて、体力の低下がどれ程の危険を伴うものなのか。この体にまとわりつく膜が、否応なしに体力を削げ、エンダを死に追いやるというのに。

「・・・ま、いいけどね。俺もここではやることねえし・・・ま、もう少し付き合つてやらあ。・・・タロの野郎も、お前に慣れてやがるしな（怒）」

「・・・すまない」

元の言葉に、ハルは本心から謝罪した。元には、本当に感謝している。行き倒れていた自分を助けてくれただけではなく、体力が回復

するまで面倒まで見てくれている。利用しているよつで、本当に申し訳ないのだが、今はもう元だけが頼りなのだ。

「早く体力を回復して・・・出て行くから」

元は頭を搔きながら、んな事言つてんじやねえよ。と呴いた。目線を下に移し、足で地面をガシガシと押し固める。チラリと見た目線の先には、じつと自分を見続けているタロの視線が刺す様に見えた。

「ちつ、恨めしそうに見てんじやねー。何だよ、俺正しいんだぜ？ 何かあつたら困るの自分なのにさ・・・たく、俺は間違った事、言つてなくねえ？？」

元は、寂しそうに口を尖らせた。

元が深い溜息を吐いた。

「だから・・・無理すんなつて・・・」

その日の午後、一人と一匹は森の中に居た。忠告を聞き入れないハルの付き添いで、森の中を散策する羽目になっていた。森は見た目以上に深く、奥に行けば行く程深い縁に覆われていく。

「付き合わせて・・・」

ハルの言葉に、怒ったように元は答える。

「悪いって思つてんなら、大人しくしていてくれた方がよっぽどいいよ。・・・でかさあ、迷惑や面倒だから言つてんじゃねえから。今せ、無理して長引いたらどうすんの？」

前に言つたけど、俺達エンダの使命は、獣の脅威から民を救う事だ。俺達はそれだけの為に、この世界に存在していると言つても過言じやねえ。だからさ、獣と戦わずして、死ぬなんてエンダの恥だぜ。つていうか、まだあんたはエンダじゃないけどな。」

右も左も分からないこの世界で、エンダと言われても正直ピンと来ない。増してや、ここに連れて来られた真の目的が、獣を倒しこの世界の民を救う事だったとは。

『倒す・・・って、色んな意味で無理だと思つたけど・・・』

もとの世界では、生きる為に得る食料も、見知らぬ誰かが殺生したものだ。甘いと言われば、甘いのだろう。

『この手で、命を摘むなんて・・・出来るのか？』

ハルは、自分の宿命を受け入れきれない自分の甘さを恥じた。

『止まつたら駄目だ。今は進むしかない・・・』

そう何度も自分に言い聞かせて、無理やり前向きにならうと足搔いている。

そんなハルの苦悩を横目で見ながら、元は言葉を更に繋げた。

「俺の話で申し訳ねーけど、俺がここに来たばっかの時に、自分のレベル以上の獣を狙つたんだよ。そりや、倒せればかなりのスキルアップが望める。この世界は、獣を倒せば倒す程、自力が上がるからな。

皆、躍起さ（いやスキルアップの為に獣を倒している訳じやないが・・・）誰も自分達が死ぬなんて思つちゃいねえから、無理したんだな。命からがら逃げおおせたが、俺以外は回復出来なくて消えちまつた。死ななきゃ大丈夫じゃ、ねえ。体力の限界が来たら、突然消えんだ。

もとの世界に戻ったなんて言つ奴らもいるが、そんな都合のいい話なんて信じられねえ。この世界に連れて来られる前に、散々言われたしな。

こんな世界で、何も残せずに消滅するなんて俺は嫌だね。

獣を狩るのが俺らの使命だとしても、もっと目的持つて生きたいじゃん。俺は五つの海を越えた場所にあると言われている、獣が生まるる場所を潰したいんだ。それが出来れば、ここに来た意味もあるつてもんだろう？」

ここまで一気に話した元は、少し間を置いてこう言った。

「死んだら元も子もねえ。やりたい事も出来ずに消えてもいいのかよ」

「・・・」

元の言いたい事は良く分かる。少しずつ回復している体力が、少しづつ剥ぎ取られていく。

『この外気が一番のネックだ・・・』

そうハルは思う。この世界の大気は、どこまでも澄んでいて、体の細胞一つ一つに酸素が行き渡る・・・そんな感覚を受ける。心地いい、心地いいはずなのに・・・皮膚が、内臓が、髪の毛一本までもこの世界を拒絶している。体を守る皮膚が一枚剥がされた様な、この居心地の悪さが、お前はこの世界の住人ではない事を忘れるな、と言われているようなものだ。

この世界に来て、常に胃もたれと吐き気に苦しめられていた。体調が良い日でも、少し無理をすると、症状が重くなり立つ事すら困難になる。

ハルは、元の言葉を噛みしめた。

『体力の回復が遅れたら、私はこの世界からも消えてしまう・・・。もとの世界に帰れる?』

骸骨を思い出し、自虐的に少し笑つた。そして、

『死ねない。私は、まだ死ねない』

そう拳を握り締める。

『でもこのままじゃ・・・』

そんなハルを見ながら、元は頭をボリボリと搔き、首をゴキゴキと鳴らした。元は今後の事を考えあぐねていたのだ。

『いっつは・・・もたないかもしぬねえな。あまりにも体力が無さ過ぎる。もう少しスキルアップすれば、体力の回復が勝るんだがなあ。

でもなあ、獣と戦つても絶対勝てねえし』

元は考えに集中するあまり、考えている事が口から零れ落ちていた。脳と口が直結しているかのように、大きな独り言をブツブツと呟いている。

「んー・・・始まりの地に行けば、今よりずっと楽になるだろうが・・・ここからは随分距離があるし、如何せん交通手段があれじやあ、着くまでにおつ死んじゃうし。それにあいつ、すげー獣くせーから、もう臭くてそれだけで死んじゃうつていうか。

かと言つて、行かなきや何も始まらねえし・・・。あーもう! 何で、洗礼を受けてねえ奴が、あんな場所で行き倒れていたんだ?」ハルは蓄積する疲労感を感じつつ、元の言葉に耳を傾けていた。

『いい奴だな』

本心からそう思う。タロと言えば、ハルの肩にちょこんと乗りながら、あまりにも大きな元の独り言に、少し呆れ気味に元を見ている。

「ヴー・・・！ もう少し体力が残っていたら、話は違つんだが・  
・」

元は頭をガシガシと搔いた。どうやつてしても、ハルが始まりの地に足を踏み入れる事が出来る気がしないのだ。

「でも、自分の世界を捨ててこの世界に来たつてんのに・・・。  
エンダにも成れずに死ぬなんて、あんまりだよなあ。何とかしてや  
りてえんだけど」

どうにも出来ない状況に、元は思わず天を仰いだ。ハルは元の独り言を、ジッと噛みしめていた。

・・・疲れた。ハルは、木の根元にペタンと座り込んで、一步も動けずにいた。森の半分まで行き、宿に引き返している途中だつた。肩で息をするハルを見かねて、元が近くの泉まで湧水を汲みに行つたのだ。

「何やつているの？ 私」

ギリリツと拳を握り締め、力無く地面を叩き付けた。これでは本末転倒ではないか・・・。元の忠告も聞かず自分勝手に動き回つて、動けなくなつたら助けてもらつて。親切に甘えて・・・最悪だ・・・。自己嫌惡で死にそうになる。分かつていて、分かつていてのに、どうすればいいのか分からぬ。ただ、体力を付けたいだけなのに。

ハルは溜息交じりに、タロの姿を追つて木の上を見た。木の枝では、ハルの傍に残つたタロが、ちょこちょこ動き回つてゐる。タロの無邪氣な様子を見ると、心が少し安らぐような気持ちになりフツと微笑んだ。しかしその瞬間、

「あつ！」

タロの直ぐ背後に大きな影が写つた。ゆっくりと大木に巻きつきながら、タロの背後から迫つてきてゐる。この位置からは全貌が掴めない程、大きい・・・ハルの三倍以上あらうかという大蛇の姿だつた

「タロ！ 危ない！ 逃げて！ ！」

グワッ！

ハルの声とともに、大蛇はタロを目掛けて襲つてきた。ハルの声でタロは間一髪、別の枝に飛び移り難を逃れた。つい先程まで飛び跳ねていた場所は、大蛇の攻撃で、無残にも大きくえぐられてゐる。

「タロッ！」

しかし飛び移つた先の枝は、タロの体重を支えきれていなか。そのままバランスを崩し、枝にしがみ付く体勢に、

「くうー・・・ん」

タロが、か細く鳴いた。その姿に大蛇は体を大きく揺らし、タイミングを図りながら飛びかかるばかりだ。

「タロから離れて！」

ハルは咄嗟に、歩行用の補助として渡されていたメイスを、大蛇目掛けて投げ付けた。こんな杖がタロの助けになるとは思わなかつたが、

『何とか気を逸らせないと！』

その一心であつた。メイスが手を離れた瞬間、

「えつ？」

ハルの僅かな体力がゴソッともぎ取られ、強烈な脱力感に襲われる。

「た・タロ・・・」

闇雲に投げられたメイスは、一気に大蛇に向かつて加速した。ドスッ！

メイスがおびただしい何かを纏つて、明確な意志を持つかの様に大蛇の額に突き刺さつた。

ドオオン！！

大蛇は体を傾倒させ、地響きと共に落下した。落下の衝撃で、落ち葉が巻き上がり宙に舞う。

同時に、ハルもその場に倒れこんだ。

「馬鹿野郎！..」

次にハルが目が覚めた時には、何故か宿のベッドの中だった。朦朧とする意識の中で、元と目が合つた瞬間、間髪入れずに怒鳴られたのだ。

もう、どこにも力が入らず、瞼すら開けていられない。

「今はゆっくり休むんだ。動くなよ、辛うじて残つてている体力まで無くなっちゃう」

元の声が遠い所から聞こえてくる。メイスを投げ付けた時からの記憶が途切れ、何故無事だったのか不思議でならない。ただただ重力

が何倍も負荷され、深い闇に体が沈んでいく様だ。

ハルが再度深い眠りに落ちかけた時、ポタポタと手の甲に水滴が落ちた。何とか目線を向けると、タロがポロポロと涙を落している。

「タ・・・」

無事で良かった・・・思わず動かない手を上げようとした時、

「動くんじゃねえってんだろ！死にてえのか！！」

元の怒涛が響く。

「寝ろっ！ 今は何も考えずに寝るんだ！」

その声に導かれる様に、ハルはまた眠りといつ深い底に落ちて行った。

「いよっしゃー、この峠を越えたら始まりの地だ!! 一気に越えつぞ!!」

ドドドオドドオドドオドオオツ

狂ったように駆けるギヴソンを操りながら、元は野太い声で叫んだ。ハルを左肩に乗せ、右手でギヴソンを扱う姿は、正に戦士そのもので一種の風格すら感じさせる。

「大丈夫か? しんどかつたら、休むぞ!? 辛かつたら後ろに移れよな」

ギヴソンを走らせ半日が経過しているが、元とギヴソンに疲労の色は全く見えない。

「・・・かまわん。このまま走り続けてくれ。元が休みたかったら休めばいい・・・」

力の限り駆け抜ける、ギヴソンの乗り心地は決して良くない。しかし弱音など吐いていられない。ようやく始まりの地に立てるのだから。元からエンダが始まっている地を踏まなければならない理由を聞いてから、居ても立つてもいられなくなつた。

『あの縁の生き物が、私を連れて行こうとしていた場所・・・か「ガハハ! んじゃーこのまま一気に行くぜ! 天気が良い内に、距離稼ぎたいからなあ!』

元は、そう叫びながら、ガツツとギヴソンの脇腹を勢いよく蹴り上げた。ギヴソンは狂つたように雄叫びを上げ、更に走りを加速させる。

元は手綱を握り締め、視線を遠くに飛ばした。進むべき方向を確認し、後は手綱を操るだけだ。峠は深く険しいが、ギヴソンの足であれば今日中に越える事が出来るだろう。方向が固まると、元はチラリと肩の上のハルを見た。ハルは長い髪を風になびかせながら、遙か先をジッと見続いている。表情からは何を考えているのか、汲

み取る事は出来ない。最近は前にも増して、感情を表に出さなくなつていた。

『しかし・・・何が起きたかと思つたぜ』  
あの時、ハルの叫び声で駆け付けてみれば、ハルが大蛇を前にして倒れていた。

「くそ！！！ 遅かつたか！」

慌てて剣を抜いて駆け寄れば、大蛇は既に絶命していて、その体は尻尾から消え始めていた。長い胴体に隠れて見えなかつたが、額にメイスが突き刺さつている。どう見ても致命傷は、この額のメイズしか考えられない。元は訳が分からぬまま、すぐさまハルの首元に手を添えて脈を確かめた。

「極僅かだが・・・脈はある」

元は、そのままゅつくりとハルを抱え上げた。

「うーん・・・

「タ、タロー！！（この俺がタロの安否を忘れるなんて）」  
枝にしがみ付いたままのタロの姿と、えぐられた大木を見て、元は眉間に皺を寄せた。

恐らくタロを助ける為に、大蛇にメイスを投げつけたのだろう。しかしあんな細い棒だ。ただ闇雲に投げただけでは、当然に仕留める事は出来ない。元はメイスに手を掛け、グイッと引き抜いた。元は戦士だ。当然に魔力はなく感じる事は不可能だが、このメイスは名手の作で魔力を増大させる効力があるらしい。

「こいつの消耗を考えると、魔力を使ってメイスを武器にした・・・、と考えるのが妥当か？」

しかし、と元は思う。

『仮に魔力が使えたとして、あの蛇は低スキル者が倒せるレベルじゃねえ。しかもこいつはエンダじゃねえんだぞ？ 何なんだ、こいつは。

・・・ま、獸を倒した事で、旅が出来る程度までスキルも上がった

しな。結果オーライか』

思考が行き止まり、ジロリとハルを見た。正確には、ハルの肩に乗っているタロを見た。あの日以来、片時もハルの傍を離れようとしない。何とも安心しきった顔で、ハルと同じ先を見ている。

時々、嬉しそうに擦り寄る姿を見ると、無性に胸の奥がムズムズするのだ。

『・・・もしもーし。最初に獸から襲われていたお前を助けたの、俺なんですか?』

かつてない喪失感に胸がざわつく。

『もしかして、もしかして・・・このままハルについて行っちゃうんじゃ?』

ハルはエンダになつたとしても、俺と一緒に旅が出来るレベルじゃねえ。始まりの地まで送つたら、そこで別れる・・・その時タロはどうすんの?』

今までタロと過ごしてきた思い出が、走馬灯のように浮かんでは消えていく。(いつも噛まれたり、引っ搔かれたりして、ろくな思い出がないが) タロとの別れを想像するだけで、元の田頭がジインと熱くなつた。

『タロ・・・』

元は思わず溢れる涙を、誰にも気づかれないうつむいて拭つた。

ハルは深い溜息を吐いた。

「いやいや、溜息吐いたつて仕方無いからさ。たく、疲れたんならそう言えつづーの！」

元達は、始まりの地に程近い町の宿に居た。またもやハルはベッドの中だつたし、元は相変わらずブツブツ文句を言っている。

予定では、とっくに始まりの地に到着している筈だつた・・・そ

う思うと、ハルの心は落ち着かず、気持ちだけが逸つて仕方がない。

「肝が冷えたぜ」

道中始まり地を目前にして、ハルが元の肩から後ろに倒れ込んだのだ。間一髪で元が体を支えたが、ギヴソンの体から振り落される一步手前で、最後の渓谷に差し掛かった場所での出来事だった。

宿のベッドに寝かされたハルは、すぐ尽きる体力にうんざりしている様子で、真上の天井を見据えながら元に問う。

「あとどれ位で、始まりの地に着く？」

ハルの問いに「今は休む時だからな」そう言いながら、元は乱雑にブーツを脱ぎ捨てた。

「あー・・・この町には以前立ち寄った事があるから・・・あの当時で四日位か。めちゃ弱かったからなあ、あんな距離に四日つて・・・ハハハ。

今回はギヴソンもいるし、本当に目前だよ。だからあんま焦るなつて」

当時の事を思い出し「くはは」と笑つた。自分よりも小さい獣ですら、命からがら逃げ帰つた事もある。それが今やギヴソンクラスを従えるまでになつたのだ。感慨深いものを感じる。

「あんなに弱くて、よく生き延びられたもんだよなあ。って言つが、ここまで強くなれるもんなんかねえ。ゲームみたいに、戦えば

戦うほど強くなるからさ。」う見ても俺、ちつたー名の知れた戦士なんだぜ？ここら辺に来るとさ、昔を思い出すよ。あんなギリギリのラインでよく死なずについたもんだ」

元は昔を懐かしみ、目を細めた。宿が用意したお茶に口を付け、フウと溜息を吐く。宿の窓から、太陽が沈むオレンジ色の光が優しく差し込んで眩しい。

「当時の俺は、弱いながらに強くなりたい一心でさ・・・」

「・・・」

「あの・・・聞いてる？」

全く反応が無いハルに目を向けると、寝息を立てて寝入っていた。

最近無理せず寝てくれるのは、確かに有り難かつたが、

「あつそ。・・・えつと、風呂入るつと」

軽い溜息を吐きながら、そつと呟いた。

翌日は眩い位の快晴で、気持ちの良い朝だった。

「この辺りは、気候も良くて低レベル者にとっては、生きやすい場所さ」

宿の窓を開きながら、太陽の光に目を細め、元がハルに言つ。

「そうか、生きやすい場所か・・・」

そう元の言葉を復唱する。少し動けるようになつたハルは、いつもの如く町に足を向けた。この世界が異世界で、民は獸に怯え暮らす日々を強いられているとはい、人の営みは自分達の世界と全く変わらない。

「あのな～」

少し諦めが入りながらも、元は根気よくハルを戒める。

「昨日ゆっくり休んだから調子が良いんだ。そもそも町に出たくなかつたら、宿に居ればよいだろ？」

空氣のように言い放つハルに、

「うわ、何その言い方。お前がやたらめつたら倒れつから心配してやつてんのに。大体、何が調子が良いつて？ 嘘つくなつつの！」

！もう、知らんぞ！ホントに知らんぞ！倒れても、面倒見き  
れんからな！」

「今日は調子が良い」

「つて言いながら、お前すぐ倒れんじゃん

そんな取り留めない会話を繰り返しながら（主にしゃべっているのは元だが）、二人と一匹は町の中央へと歩みを進めた。

ギヴソンは、町からずつと離れた場所に厳重に繋がれている。この町には、ギヴソンレベルを扱える施設が無く、苦肉の策として、人が踏み入らない沼地に置いてきたのだ。戻った時のギヴソンの不機嫌さを思うと、元の気はドッと重くなるのだ。

『機嫌が悪いーと、あいつモロ走りに出るからなあ。食料を買って行つて機嫌取らなきやな』

元はゲンナリしながら、沼で暴れているだろうギヴソンを思い返す。「きっと全身泥だらけだ。体を洗う水も持つていこう……」等と、ブツブツ呟いている。

中央では、賑やかな市場が催されており、この世界の人々が大勢行き来していた。至る所に店が出ていて、荒野と一軒宿が世界の全てだったハルは、町の活気に内心驚く。中央から少し離れた場所にベンチを見つけ、元はハルを座らせた。

「飲み物買つてくるから」

そう言つて、元は市場の中に消えて行つた。

「面倒見が良い男だ・・・」

人ごみに消えていく元を見ながら、タロに向かつてそう呟いた。タロはいかにも興味がなさそうに、クハーと大きな欠伸を一つして、ハルの手の中で丸くなっている。自分を見つけてくれたタロや、始まりの地に送つてくれる元を思うと、この世界で得た奇跡に、感謝してもしきれない。

「ありがたいな・・・」

元と離れて随分の時間が経つが、一向に帰つてくる気配がない。  
探しに行くのも、この人ごみだ。行き違いになると、後々（元が）  
面倒なので、動かず待つことにした。

ハルが目を閉じると、町の雜踏が音楽のように聞こえてくる。異  
国の町は、こんな感じなのだろうか。人々の声すら、流れる川のよ  
うに留まる事を知らず、ハルを通り過ぎて行く。

心地よい雜踏の中、ウトウトとハルが仕掛けた時・・・市場か  
ら、どよめきに似た歎声が上がった。集まつた人々の輪の中に目  
を向けると、見覚えがある大きな男が抜け出した。人々の羨望の眼  
差しを受けながら、元がこちらに歩いてくる。元は、ドカツとハル  
の隣に腰掛けると、綺麗な瓶に入つた飲み物を渡した。

「いや～すまん。待たせたな。実は、婆さんが物盗りにあつて  
困つていたから、犯人探しをする羽目になつちまつて。

掴まえたは良いけど、それが以前、ここで捕まえた奴でさ。こいつ  
も懲りないなと思っていたら、何と物盗りにあつていた婆さんも同  
じ人でさ。全く！狙われているよ、ありや～」

そう一気に話し、グビリとジュースを飲み干した。元から手渡され  
たジュースを口に運ぶと、果汁の程良い酸味と甘みに体が癒されて  
いく。

「やっぱ平和な町だよなあ・・・。一つ田の海を越えたらこんな  
もんじゃねえから。・・・何だか、平和すぎて気が緩むよ。ほら、  
見てよこれ、婆さんから貰つちました。いらねえって言つたんだけ  
どせ、今更ながらに、腰当て。ハハハ」

笑う元の言葉を、ハルは異国の言葉のように聞いていた。

始まりの地と称される町は、俄かに騒然としていた。異質な物を見る様な人々の目線は、明らかに元達一向に向けられている。

「我々の何がそんなに珍しいんだ？」

注目されていいる事にすら気付いて居なかつた元は、屋台の肉の塊に目を向けながら言つた。

「ん~？ 注目？？ ・・・あ~・・・こいつが珍しいんだろう？ こんな獣、ここいら辺にはいないからなあ」

自分の倍以上もあるギヴソンの手綱を、難なく引きながら飄々と答える。いつもは町に持ち込む事などしないのだが、周辺に待機させる場所がない為の苦肉の策だつた。

確かに元の言う通りで、この町には似つかわしくない獣だ。元に自由を奪われ大人しくしているが、獰猛な性質は隠しきれる筈も無く、全面に出る殺氣に町の人々が警戒するのも無理もない。

『せめてその滴り落ちる涎だけでも、押さえる事が出来れば・・・』

そうは思いながらも、異質なのはギヴソンだけではない、とも思つ。痩せて枝の様になつたハルも、エンダとして相当の使い手であろう元も、平和なこの町には不釣り合いでいた。町の雑踏に気を取られていたハルは、フウと息を吐いた。

『この町が、始まりの地。・・・やつと、やつとここまで来た。ここから、全てが始まる・・・』

これから先の旅を思うと浮かれても居られないのだが、何とも穏やかで心が軽くなる町にハルは目を細めた。何処からともなく聞こえる笛の音、鈴の音、軽やかな音楽。本当に獣に苦しめられている世界なのだろうか？ ハルはこの世界の民に目を向けた。

『同じ姿形ではあるが・・・違和感だな。どことなく生氣を感じない』

生気が薄い。楽しく走り回る子供達ですら、気持ちの高揚を感じ取る事が出来ない。エンダと言われる人々と一線を画していた。

『当たり前か・・・異世界の民なのだ。しかし人型だとすると、あの生き物達は何だつたのだ？ この場所で骸骨が待ち構えて居るかとも思つたが、今の処そんな気配は無い。・・・死んだと思つているのだろうか？』

殺されかけた事を思い出し、人知れず冷笑した。

「おい、着いたぞ！」

元の声に、ハルはハツとして顔を上げた。

「ここが「始まりの地」だ」

元達の周りに、一風の乾いた風が吹き抜け、ハルの髪を揺らす。眼前に現れたのは、白く巨大な建造物だった。どのように立てたのか理解出来ない程、建物の方は霞みがかつている。

「ここが？ 始まりの地とはこの町の事を差している訳ではないのか」

キヨトンとするハルの言葉に、元は深い溜息を吐きながら言葉を繋いだ。

「おめえ、ホント何も聞いてないのな。始まりの地ってんのは、この宮殿そのものを差してんだ。町を訪れただけでは、エンダに成れねえ事は説明しているよな。

ここで洗礼を受けて、初めてエンダになれる。エンダにとつては、この宮殿から全てが始まんだ。ここが、「始まりの地」と呼ばれる由縁だよ」

のどかで小さなこの町に全く不似合いな上、建物 자체が尊厳且つ厳格の象徴だと言わんばかりだ。訪れる者達を圧倒的に威圧して、前に立つのも息苦しくなる。

ここが始まりの地だと言われるように、建物の周りには、ハルと同じ目的であろう人々が一際多く集まっていた。これから起ころる事に集中しなければならないのだが、様々な思いが脳裏を過り気が散

漫になる。

『自分達の世界を捨てた事に、後悔している様子はない。何故あんなに意気揚々と・・・』

この思いは、非難や否定ではない。そう思えた方が、どんなに楽だろつか・・・心から思うのだ。正直聞きたい位だ。何故その人生を選ぶ事が出来たのかと。

『元が何故エンダと成ることを選んだのか、いつか聞く日が来るのだろうか・・・』

そんなエンダ達の間をすり抜け、先に進むハルに元が声を掛ける。

「おい、俺達はここで待っているから。戻ってきたここに寄りな。話したい事がある。あ、それと「協会」の奴らを怒らせんなよ。面倒な奴らだから」

そう言つて元は、入口の端にドカッと座り込んだ。手綱を引く強さで、ギヴソンの体が土に沈む。そしてハルの後に着いて行くタロをガシツと掴んで、諭す様に言った。

「俺達は留守番だ。本人しか行けねえんだ」

「キュー・・・ん」

不服そうに鳴くタロに目配せをして、ハルは入口に踵を返す。眼前に立ち塞がる宮殿に足を踏み込む瞬間、

「ドン！」

「あ、すみません！」

建物の入り口で小さな男の子が飛び出して來た。少年は、ペコリと頭を下げるが、意気揚々と町に飛び出して行く。そうかと思えば、入口で美しい女性が頭をもたげて座り込んでいた。

「・・・」

そんな人々を横目に、ハルは宮殿に足を踏み入れた。

「ここにちは。始まりの地によつこそ」

ハルが扉を開いた時、全身を白装束で包んだ女性から声を掛けられた。抑揚のない声がやけに耳に残る。

「ここは始まりの地。エンダが世界から洗礼を受ける場所。

・・・どうぞこちらに」

女性に導かれるまま、迷路のように広い宮殿の中を着いて行く。ハルは無意識にゴクリと息を飲んだ。この場所の事、そしてこれから起きた事を、あらかた元から聞いていたからだ。この場所で洗礼を受けると、自分はエンダとなる。

ハルの訪問を事前から分かつていたかのように、説明も無く大広間に案内され、段取り良く進んでいく。太陽の光が燐々と降り注ぐ広間には、全身を白装束で纏つた人物が六人、円をなぞる様に立っていた。着衣からそれ相当の人物だと見て取れが、どの人物も深くフード被りその表情を見る事は叶わない。

『協会の民か・・・』

「じうれ、円の中にお立ち下さい」

女性の感情のない声が続く。

ハルは言われるままに、広間の中心に向かつて歩みを進めた。目を凝らすと、その円は中心から外に向かつて不思議な文字が彫られている。

ハルが円の中心に、立ち位置を決めた時、頭上から光り輝く気配を感じた。ふと目を上げると、女神と天使が描かれた壁画が、少しずつその形を変えていき、溢れんばかりの星が零れる夜空に変貌を遂げた。

『綺麗だな・・・』

こんな緊迫した状態なのに、暫し心を奪われる程、幻想的な光景だ。

星が降り落ちそうな光景に、この世界だつたらその星ですら掴む事が出来るのではないか・・・そんな事を考えていた。

カツツ

その時、正面に位置付けている人物が、床に杖を突き立てた。

「こここの場所をお分かりか？」

「・・・・」

反応を示さないハルに、その人物は重々しい低い声で答えた。

「・・・ふう、良からう。

もう数百年以上前になるが、この世界は凶悪な獣が溢れだし、人々の生活を脅かすようになった。どこから派生したのかすら分からぬ上、更なる事実は先人達を驚愕させた。その獣は、我々の攻撃が一切通じない生物だったのだ。我々にて、戦う事に秀でた歴史がある、がしかし、どれだけの兵力を持っていたとしても、その獣には傷一つ付けることが出来なかつた。

我々では成すすべも無く、いよいよ人類滅亡かと思われた時、多くの星が降る夜にその奇跡は起こつた。

突如現れた異世界の民は、自らをエンダと名乗つたと言う。エンダは、獣を一太刀で倒し、既に風化していた魔法を使つた。先人達は、正に困窮した世界に、救世主が現れたと歡喜した。

しかし、この世界でエンダが生き続ける事は容易い事ではない。お主にも気づいておるだろうが、水も太陽の光も、大気ですらエンダの生命を脅かす。

傷ついたエンダを救うべく、我々の祖先が回復の祈りを捧げた場所が、ここ「始まりの地」だ。先人達の祈りは天に届き、エンダがこの世界で生きていく奇跡を授かつた。

天の奇跡、それはエンダとエンダの属していた世界の柵を断ち切り、この世界の危機を救うべくした能力を授かる事。能力は人それぞれ、それが洗礼だ。

天の奇跡によつて、貴方はこの世界を救うエンダとなるのだ」

ハルは白装束の人物の話を、静かに聞き入っていた。

『天の奇跡ね……胡散くさい話しだ。しかし、昔話とはそんなものか。

・・・エンダ・・・この世界を救う異世界の民か』

白装束に身を包んだ人物は、更に語尾を強めて、

「さあ、確認させて頂こう。お主はこの世界に蔓延る邪悪な根源を打ち破る為に、我々の民を救うべくこの地に降り立つた。相違無いか？」

声を聞く限りでは、かなりの高齢のようだ。十分すぎる程の存在感に、この建物と同じ様な尊厳と威厳を感じる。

『断る人間などいないのだろうな・・・』

ハルは静かに息を吸い、

「そのつもりだ」

力強く、そう答えた。

ハルの返事を聞く否や、白装束を纏つた六人は、手を胸で組み、呪文を詠唱し始めた。その呪文に反応するかのように、床の円が光り輝き、何重もの円が浮かび上がる。そして、そのまま光の糸は呪文となり、ハルを包み込んでいく。ハルは折り重なる細い光の糸を、微動だにせず見入つていた。

『本当に、不思議な世界だな・・・』

一片の隙間もなく、光の糸がハルを包みこんだ時、厳格な声が言葉を紡ぐ。

「古き時代より、この地はエンダを数多く導いてきた。それは、神のみぞ知る、エンダの在り方を指示す。

武器を持つて戦うか、己の体を鍛錬して武器とするか、精霊との契約にて魔族になりて敵を滅ぼすか、聖者の加護を身に纏い救いの手を差し伸べるか……幾多ものエンダの在り方。その在り方を今指し示さん。

それ以上でもそれ以下でもない。それがエンダ』

取り巻く呪文がひときわ大きくなつた。あまりに何重にも重なり合つものだから、歌の様に聞こえてくる。

ハルはグッと拳に力を込めた。ハルにはここで起きる全ての事実を受け入れる覚悟がある。どのタイプのエンダになろうとも、これから先自分の思いを見失わない様に、今日の事を心に刻み込む。

光に包まれながら、白装束の言葉を思い返していた。

『エンダとエンダの属する世界の柵を断ち切り・・・か』

今やハルは、人の形を成した光の人型と化していた。

「やつと息が出来た」

この光に包まれた時から、今までの息苦しさから解放され、膨大な空気が体内に染み渡つていく。身体の細胞一つ一つに、自分を守る薄い膜が出来たかのようだ。

どれくらいの時間が経つたのだろう、白装束の人々の呪文の声が、次第に小さくなつていいく。完全に聞こえなくなつたその瞬間、身を覆う光の糸は消えてなくなり、それだけではない。協会の人々も、零れそうな星を湛えた天井も、床に描かれていた円も全てが消え失せていた。

あるのはガランとした大広間だけとなり、今や誰一人としての気配も感じられない。

「・・・」

ハルは自身の変化に目を移した。今まで着用していた服は、ズボンの丈が異様に長い（合つサイズが無かつたのか元の趣味が悪いのかは不明）男の子が着る様な服だったのに、今は白い布のシンプルなワンピースになつていたし、皮の靴は皮のブーツに変化していた。

「何かには成つたらしいな」

そう呟いた時、ハルの体の奥底から、ある感情が噴き出した。

「・・・え？」

無意識に瞳から涙が溢れ出る。感動・不安・希望・恐怖・喜び・悲しみ・愛しみ・怒り・・・数多もの感情に押し潰されそうだ。この感情をどう説明していいのか分からぬ。得も言われぬ感情が、涙となつて溢れだすのだ。

そして全ての涙が流れ落ちた時、手に受けた涙を見ながら、ハルは目を細めた。

「そうか・・・これは、あの世界との決別の涙だ」

ハルは、この事実を受け入れた。自分でも驚くほど、心は静かで穏やかだった。涙は悲しくて流れた訳ではない。感情とは別の場所から、涙が零れ落ちたのだ。

一度天井を見上げ目を閉じ、濡れた頬を袖でグイッと拭くと、  
「行くぞ」

誰に言つ訳でもなく呟いた後、出口に向かって歩き始めた。

扉を開けると、人々の雜踏が波の様に飛び込んできた。広間に案内された時には、誰一人として会わなかつた通路に今は沢山の人々が行き来している。

『・・・』

ハルが怪訝そうに周りを見渡していると、庭から感嘆に似た溜息が零れた。中央に配置された噴水に、人だかりが出来ている。溜息の中心に位置する男性は、金髪の長い髪を無造作に垂らし、派手な衣装を身に纏っている。何とも人目を引くほど美しい。

『吟遊詩人か・・・』

男が、弦をポロンと奏でた。

「五つの海、貴方を慕いて越える海

荒れ狂う海の支配者よ

天驅ける神の化身よ

その歌声で僕の願いを叶えておくれ

僕の願いは、貴方と共に在る筈なのに

始めに交わされた約束は、貴方を苦しめるだけとなつた

千の夜を越えて、繰り返される悲劇と喜劇

貴方の悲しみに終止符を

僕の苦悩に終止符を

世界の望みを探し出し、その手で叶えてくれないか  
・・・さあ、五つの海を越えて、翡翠の涙を越えて、どうぞ僕の  
元に

毎夜貴方を慕いて夢を見る

僕の懺悔が海を越えて

貴方に届く夢を見る

どうか僕の願いを叶えておくれ・・・そして許して

貴方を慕つて千の夜・・・

ハルは、歩みを止めて吟遊詩人の歌に暫し聞き入っていた。

「ふむ・・・そろそろか

外で待つ元は、胡坐に頬杖をつきながら、ハルが出てくるのを待つていた。ハルが建物に入つて一時間が過ぎた頃だ。自分の時の事を思えば、じきに出てくるだろう。元は、落ち着かない個性的な同行者に目を向けた。

額に宝玉を持つ獣ギヴソンは、周囲の気配をくまなく窺っている。隙あらば、いつでも襲いかかるチャンスを狙っているのだろう（ま、そんなミスしねえけど）。タロはタロで、元の肩に乗つたり歩いて正面入り口まで行つたりと、ソワソワしている（この様子を見て、元はガックリと肩を落とした）。そんな一匹の動向を目で追いなが

『 そうか・・・俺、ここから旅立つて、もう一年以上経ったのか』

そう懐かしい様な、それでいてこんな所で何やつてんだという罪悪感が襲う。こんなにのんびりしている間にも、沢山の命が危険に晒されているといふのに・・・。その時、ギヴソンがピクリと体を硬直させた。

「ん？」

元がギヴソンの意識の先に目を向けると、白装束を着た人物がこちらに向かつて歩いてくる。

「げつ」

元の気持ちに反応するように、ググルルルルルッ！ ギヴソンは低く唸りながら、地面に鋭い爪を喰い込ませた。

「暴れんな・・・」

元はボソリと呟くと、ギヴソンの手綱をグッと握り締め、地面にめり込ませる。その人物は元の前に立ちはだかると、ギヴソンの殺気など氣にも留めず淡々と言葉を繋いだ。

「貴方・・・困りますね。」

こんな場所に、一つ目の海を越えた世界の生き物を連れ込むとは。しかも、その獣の額・・・人を襲つた事がありますね？ 何故狩らないのか理解出来ませんよ。

貴方もそうだ。何故今更「始まりの地」に？ ここを出発されて一年以上お立ちのようですが。貴方がたの役割をお忘れですか？ エンダとは獣を狩る為だけに存在して居る事を、忘れてはいけませんよ。

そもそもどうやってこの地に？ 原則海を越えたら、戻つて来られない筈ですが？」

表情はフードに隠れ見る事は叶わないが、元を侮蔑しているのは明らかだ。矢継ぎ早に質問を重ねる協会の人間に、元は姿勢を崩さず飄々と答えた。

「俺だつて知らねえーよ。たく、せつかく一つ目の海を越えて、

これからつて時に、いきなりこの「始まりの地」に飛ばされたんだ。どうやって戻ってきたのかもよく分からねえ。洞窟の中で戦つている時だ。こいつらと一緒に。

それにこいつは、俺の足だ。移動手段として獣を従えるのは、エンダが成せる技、自分よりも弱い獣だ。問題ないだろ？」

元の言葉に、ギヴソンがブルリと震えた。それが怒りからか恐れなのかは分からなかつたが、今は構つていられない。狩りの対象にされたら困るのだ。

協会に属する白装束の男は、暫し考え込んでいたが、結論に到達したのか服の裾を翻し、建物方向へ歩き出した。しかし、再度振返り、元に向かつてこう言い放つた。

「貴方・・・。多少強くなつたつもりのようですが、そのレベルで満足されていては、ねえ。

こんな場所に舞い戻つて、のんびりされてるようでは・・・貴方、いつか死にますよ？

おや、これは失礼・・・』心配から言葉が過ぎましたか？」

そう言うと、後は一度も振り返る事無く、建物の中に消えて行つた。元はその姿を一瞥し、無表情なまま鼻を鳴らす。

「ち、いけすかねえ」

そう深い溜息を吐いた。協会とはあの白装束軍団の組織だ。表の世界には出てこない組織だが、この世界では絶大な影響力を持つ。名目上エンダの支援を行う組織ではあるが、エンダを駒以下程度にしか思つておらず、密かにエンダ達からは、煙たがれている組織だつた。

「全く・・・関わりたくねえってんのに・・・」

そう毒づく元の肩から、タロが勢いよく飛び降りた。その向かつた先には、

「おつ？」

白装束と入れ替わりで、ハルが入口から出て來たのだ。

変わった。

まずは服だ。不思議な現象だが、エンダが戦闘や危険に晒されると着衣がバトルドレスに変貌を遂げる。このバトルドレスが優秀で、エンダはこの服によって、数々の至難を乗り越える事が可能となるのだ。正にこれはエンダの証しだった。

「便利だぞ、それは」

元はニヤリと笑った。服だけでは無い。この世界に受け入れられた自然感は、別れる前とは劇的に違う。意図せずにレベルが上がり、多少の抵抗力は備わったが、相変わらず頬がこけ手脚は棒きれのようだつた。それが今は、頬にほんのりピンク色の血色を湛え、全身に強い生氣を発するまでに変わった。

「何かには成れたらしいな。戦士ではなさそうだが・・・」

そう言って、元は白い歯を見せながらニカツと笑った。

「ちよつと、目立ってきたな。一旦町から離れるぜ」元の提案で、一行は休む間もなく町を出た。元の言つ通り、ギヴソンに対する畏れからか、先程までの雑踏が嘘の様に、静まり返っている。獣を狩る事が生業である筈のエンダ達ですら、物影に隠れる始末だ。

一行は小高い丘に上り、どことない世界を見ていた。

「息、出来るよつになつたか？」

元にそう言われて、

『ああ、私の身体を気付かつての事か・・・』

何故こんな場所にと、ハルは訝しがつたが、エンダになつた自分への気遣いだろうと解釈をした。ハルは全身に風を受けながら小さく頷く。

「つい先程まで、この受けける風すら苦痛でしかなかつたのにな」元は扉を開けて、直ぐこの場所を訪れたから（といふか、連れて来られた）当時は多少辛かつただけで、ハルの苦しみは理解してあげられない。しかし、落ち着いた表情を見ると、エンダになれて本当に良かつたと安堵するのだ。

元は一度目を閉じ、そしてハルの掌中のタロに目を移す。

『ここからスタートするには、この上ない状態の良さだ。まずレベルは問題ないだろう。能力に対する抵抗感もなさそうだし。そうすると・・・』

元はハルの掌で安心しきつたように窓ぐタロに向、優しい眼差しを向けた。

『お別れなんだな、タロ』

始まりの地で、ハルに駆け寄る相棒の姿を見て元は決意した。熱い思いが元の胸を締め付ける。目頭が熱くなるのを、グッと押えた。

『いや、お前が幸せならば、それでいい……。ハルだったら、安心してお前を預けられるつてもんだ』

この場所を選んだには訳がある。ハルにタロを託した後に、颯爽とギヴソンに乗り込み駆けて行けば、多少なりとも記憶に残る別れになるのではないか……。そんな僅かな期待があつての事だ。

『情けない……俺』

「……頼みがある」

同時に二人が、同じ言葉を発した。何度も脳内でシュミレーションを繰り返していた元は、想定外の展開に動転してしどろもどろに答えた。

「え？ つと。あの、お先にどうぞ？」

そんな元とは対照的に、ハルが真剣な眼差しで言い放った。

「私を、元が行けるギリギリの土地まで、連れて行ってくれ」

「は？」

いつもは口数が少なく、ボソボソと話すハルが、やけにはつきりした口調だった。タロを託す事しか想像して居なかつた元は、ハルの言葉を瞬時に理解出来ず、

「連れて行け？」

そう聞き返した。そんな元の心中など気にしていないのか、ハルは言葉を繋げる。

「私は、恐らくヒーシャに成つた。既に使用出来るであろう回復魔法の原則が、自分の体にある事が分かる。

しかし、所詮人を救うための能力だ。私が望んでいた力には程遠い……が、この力を最大限まで、しかも短期間で引き上げたい」

ポカーンとハルの言葉を聞いていた元は、「ハツ」と我に返つて怒鳴つた。

「ば……馬鹿野郎！」

エンダ様とか言われて調子に乗つてんのか！？ 低スキルの回復魔

法位で、何に成れたってんだ？

まさか今日、明日で俺レベルにまでになれるとでも思つたか？舐めんな！

何か勘違いしているみてーだけど、俺達の使命は獣を狩りこの世界の民を救う事だぜ。自分の能力開発の為じや、絶対無い！！そもそも絶対死ぬつて！ 舐めてんの？ この世界をさ。能力を高めんには、それなりの努力や経験が必要なんだよ！」

ハルは、大声を出しても無駄だと言わんばかりに、無表情で答えた。

「舐めてなどおらん。勿論本気だ。進めば進むほど獣が強くなるのならば、先に進んだ方が民の為になる。一石二鳥だ」

自論を当然の様に押し付けてくるハルに、少し怯みながらも、

「はあ・・・。

だから・・・無理だつて。生き抜く事が前提だから。それつて、俺に守つてもらうのが目的だろ？？

低スキルのエンダは、この町から地道に戦つていくしかねえんだよ。そうやって皆それぞれの持ち場で戦つていけるようになるんだ。

そもそも俺がここにいるのは例外中の例外で、本来だつたら自分の力で生きていくしかねえんだ。出来ねえからつて、人を頼るなんて虫が良すぎるぜ！

元の罵倒に怯むことなく、淡々とハルは答えた。そう表情すら変えずに。

「・・・昔はそう思つていた。何よりも大切なのは過程なのだと。辿り着くまでにどれだけの努力を行つてきたのかだと、・・・いや、今でもそう思つている。そうあるべきだとも。しかし、それでは私が望む結果は得られない。もう一秒も無駄にしたくない。これが一番近道なんだ。元が言う事もよく分かるが、今はそのルールに従う事は出来ない。

・・・しかし私一人では、今直ぐに元の戦うレベルまで辿り着けない。正規のルートで行けば、恐らく元が辿ってきた倍以上の時間がかかるだろう。それでは、遅いのだ。

分かつてくれ。私は強くなりたい」

何が分かつてほしい、だ、元はギリリと歯を鳴らす。頬むから俺の話を聞いてくれ。

二人の間を優しい風が通り過ぎ、ハルの髪を揺らしている。その髪の間から垣間見るハルの強い決意が、元を突き刺し、元の心臓は、今やドクドクと大きく高鳴っていた。

「強くって・・・おめえヒーシャじゃん。ヒーシャが戦える筈ねえーだろ？癒してなんぼだろ？」

あのなあ、おめえが、前線で戦つても勝てるわきやねえじやねえか。攻撃一つ出来やしねえよ。同じレベルの奴らと組めよ！ 癒しまくつて強くなんじやないの？ ヒーシャつて。知らねえけど。

戦士の俺だつて、弱い獣から戦つて時間掛けて、少しづつ強くなつたんだよ。近道なんてねえんだよ・・・そうやって、俺はここまで来たんだ」

説く度に、元は少しづつ悲しくなっていく。短い期間だったが寝食を共にし、仲間として認めてきていたのに。俺が切々と言つてきた事の何一つ、こいつに届いていなかつた・・・そう思つてやり切れないのである。

「元が今まで伝えてくれた事・・・本当に理解している。今まで、明日にでも死ぬかもしない。でも、死なないかもしない。それに賭けたいのだ。

ムシがいいことも、分かつてている。いざとなつたら捨ててもらつても構わない。元が戦つている場所まで連れて行つてくれ」

ハルの言葉に、元は少し心が揺らぎ始めた。ハルの言葉の端先が、いちいち元の心に突き刺さるのだ。

「捨てるつて・・・（そんな事、俺が出来ないって分かつてて、こいつ！）何をそんなにあせつてんだ？ 俺がここにきて一年ちょっとだけ。たつた一年じゃねえか？ んで、こんな獰猛な奴を使えるようになるんだよ。（そう言いながら、元はギヴソンを指差す）。

てか、ごめんだよ、用心棒みたいな事……」

元の最も至極な言葉にも、ハルは諦める様子も見せず言葉を繋げる。元の怒涛と、ハルの淡々とした物言いは、実に対照的で温度差がある様に見える。しかし次の瞬間、ハルの表情に一片の必死さが垣間見れた。

「元、何度でも言う。私が元が戦う場所まで連れて行ってくれ。それから先は、別行動だ。この通りだ。頼む！」

これ程までに必死なハルを、今まで見た事が無かった。感情が高ぶる仕草を見せたのは、出会った時以来だ。それ以外は、何を考えているか分からぬ程、無表情、無関心を決め込んでいたのに。

『こいつ……ちよ、しつけえ！』

どれ程、怒鳴つてもなじつても諦めないハルに、元の中で諦めに似た感情が浮上する。

『受け入れなかつたら、こいつは一人で絶対に無理をする』  
そう思いながら、天を仰いだ。それは、自分の限界を理解していく  
いながらの無謀……。そして、それを分かつているが故に、拒絶  
する事が出来ない自分も……。

元は最後の期待を込めて、ハルに叫ぶ。

「あーもう！！　お前！！　超ムカつくんだよ！！　一人で世界  
の苦悩を背負つてます、みたいな顔しやがって！　何なんだ！！  
理由を言え、理由をよ！！

皆、洗礼を受けたら使命感で意氣揚々とするか、能力を受け入れられず体が拒絶して苦しむか、どっちかなんだ。何を抱えているんだ！　聞かねえ限り、動けねえ。海を越える度に半端なく獣は強くなるんだ。そこは俺でもギリギリ勝てるかどうか・・・。自分の身すら守れねーお前を連れていく事は、俺にとつては相当な賭けなんだ。そのリスクを負うだけの、理由があるんだろう？　俺には聞く権利があるはずだ！』

互いが一方通行の主張を続け、全く歩み寄りを見せない。そんなエンダ達のやり取りには、全く興味がないギヴソンは、面倒くさそうに丘の上で横になっている。タロは、両手に組まれたハルの掌に、ちょこんと乗つて事の成り行きを見守っていた。

『もう、一か八かだ。くそつ、こんな真剣な奴を打ち捨てて行くなんて出来ねえ。でも、お荷物抱えて戦つて、果たして生き延びる事が出来るか・・・。聞いて納得する内容だつたら仕方ねえ。連れて行くしかねえ』

元はたとえ短い期間でも、一緒に戦う意義を見出しあつた。ハルは一瞬言葉に詰まつたが、体を固くしながらも言葉を繋げる。

「元、私は決して、己の不幸を嘆いている訳ではない。私は真実が知りたいのだ。何故私がこの世界に呼ばれたのか。私がここに来る為に犠牲にされた事、策略、全てが知りたい。答えになつていな」と思うが、今はこれしか言えん。今どれ程重要な事を決めようとしているのか・・・分かつてている。しかしどのように結果が待つていたとしても、私は受け入れる。そして、絶対に現状を打破して見せる。・・・頼む。私に利用されてくれ

「利用してくれつて・・・」

ハルの言葉に、元はがっくりと肩を落とした。

元達は、相変わらず、一人と一匹で旅を続けていた。

一つ目の海はとっくの昔に越え、二つ目の海も、もう目前だ。それでも、一緒に旅を続けてるのはパーティとして相性が良かつたに他ならない。剛と柔。互いが不足している部分を、戦いの中で補う事が出来た。事実、この一年降りかかった数々の困難を乗り越えて、今この地に立っている。

元は今も獣を狩りに行く最中で、肩にハルを乗せて、豪雨の中ギブソンを走らせていた。装備しているゴーグルに否応が無しに、雨粒が打ち付ける中、元はハルにそつと手を移した。

『 そういえば、ハルのバトルドレス・・随分変わったな』

この雨の中、バトルドレスは、雨具仕様に変化して居る。灰色の世界に、一点の曇りすらないバトルドレスは、ぽつかりと浮かび上がる淡い光の様だ。しかし当のハルの表情は、深いフードの中で、何を考えているのか垣間見る事は出来ない。

『 一年前・・・エンドになつたばつかの時は、薄い布地だったのに。今や立派な厚手の布地に成つてゐるし、白を基調にした複雑な模様が入つてゐるところなんか、ヒーシャらしいな』

聖者の加護を受けているのか、多少の攻撃であれば、防御可能な強度性を兼ね備えている。これは、ハルのスキルが上がつたことに他ならない。

不思議な仕組みだが、エンドとして経験を積みレベルが上がる度に、姿形も性能も変化する。バトルドレスを見れば、そのエンドの強さを測り知る事も可能だ。

『俺のバトルドレスは、地味でつまんねえもんな~。ちょっと模様が変わる位だしへ』

元のドレスも同じ仕組みなのだが、戦士としての特性が、防具と

しての機能が重視されているらしく、レベルが上がつても差ほど変化を感じさせない。しかし「風を纏っている様だ」という元の言葉で、その性質の高さを伺い知ることが出来る。

移動距離が長いこんな口は、昔の話を思い出す。

『根負けしたんだよなあ。頑固って言つか・・・自己中っていうか。

結局何を言つても、説得しても罵倒しても、連れていけの一点張りでさ・・・。俺も甘いな・・・（フツ）』

正確に言えば、こうだった。平行線を辿る二人の間に、痺れを切らしたタロが、元の肩に乗つてきて、頬に擦り寄ってきたのだ。共に過ごした長い旅路で、今まで一度も見せた事が無い行為に、元が再起不能になり終了・・・。根負けしたというよりも、タロの一本勝ちだった。

『しつかし、何だかんだで、ホント強く成りやがった。それはすげえよ。って言つても、無茶して、死ぬ思いして、命削つて、の結果だけだ。よく死ななかつたよ、こいつ。

・・・全く痛々しいんだよ、ホント。

たく、一体何を抱えてんだか。ま、無理に聞かねえがな。ま、結果的には助かっている訳だけど』

元は「くはは」そう人知れず笑つた。

遠くで雷の音が木靈する。天候は一向に良くならず、頬を打つ雨が痛い。獣が居る場所まで、先は長い。

元はふと自分を導いた光の事を思い出す。

『あの光から聞いていた事は、全て本当だつた。この世界は危機に瀕しているし、エンダは世界を救う民だ。俺は戦士になつて、今も戦いの中に身を置いている。

・・・あの光は、強い意志がなければ扉は開かない。全てを捨てる覚悟があるか？　されば扉は開かれん・・・つて話していた。

それこそ皆が人生の絶頂期に導かれ、己の意志で扉を開ける奴らばかりだって言つてたよな。なのに、こいつはどうだ。この世界に来た意味や意義、最終的には己の意志で扉を開けてないらしい。

・・・それはちょっと、辛いよな』

元は結局、ハルを見捨てることが出来なかつた。それが一緒に旅を続けている、もう一つの理由だ。

打ちつける雨は、未だ止みそうにない・・・その時、ハルが元の肩を叩いた。元は手綱を引き、ギヴソンの走りを止める。元の耳元で告げるハルの声を聞いた。

「右斜め三〇度方向。ここから三一キロ。目的の獣がいる」

「見つけたか！ よっしゃ、行くぞ！」

ハルが指示する方向に、ギヴソンを操る。ハルは、ジッとその方向を見つめて全く動かない。これから先は、その視線の先に手綱を引くだけだ。

「ひょー・・・でけえな」

ホンの数分走った先に、獣の姿を捉えた。徐々に目的の獣に近づきながら、唸る様に咳く。まだ数百メートル程の距離があるはずなのに、障害物から垣間見えるそのサイズは、六メートル強。背中から尻尾まで厚い甲羅で覆われているその姿は、狩りが困難を究める事になりそうで、元に深い溜息を吐かせた。

獣は異常に興奮しているのか、そんな性質なのか・・・周りの木々をなぎ倒しながら前に進んでいく。時折、闇雲に暴れては、鈍い雄叫びを上げる始末だ。

今回の狩りは、こいつが一ヶ月の間に三ヶ所の町や村を襲い、壊滅させてしまった事による。一度人間を襲つた獣は、殺戮という快樂に味をしめ、的確な意識の元、人間を襲うようになる。大半の獣は獰猛な性質な上、この世界の人間は獣を傷つける事が出来ない。その為、懸賞金でエンダを雇い、獣退治を依頼するのだ。それは、

村単位であつたり、国単位だつたりする。

エンダは、「依頼所カラー」で自分のレベルに沿つた依頼を受け、契約を交わすのだ。どこのカラーも、エンダでごつた返し、酒場のような賑わいをみせていた。陽気且つ陰気、様々な思いが入り混じつた異質な空間で、依頼を探す多種多様なエンダ達が行きかう場所・・それが「依頼所カラー」だった。

膨大な依頼リストの中から、ハルが選んだ獣がこいつ「ザツツケルオン」だ。

「あ？ 無理だろ？ A’ つて無理じゃねえ？ しかも宝玉の色が深緑じゃねえか。こいつはあ、手ごわいぞ」

元はハルの手元のリストに田を落としながら、これから展開に深い溜息を吐いた。宝玉の色は、深ければ深いほど獰猛な獣と見なされる。依頼書には様々な情報が収集されているが、その中でも宝玉の色は重要な判断材料とされた。

元はネビルと呼ばれる飲み物を飲み干しながら、忠告を続ける。

「無理だつて、もう少し薄い宝玉を持った獣ですら、息絶え絶え倒したつてんのに・・・ねえこっちにしない？ ほら、このB’。これだつたら俺らでも、楽に倒せ・・・つて、ちょっと！ 聞いてる？」

最近は狩りの対象を決める度に、こんな攻防が繰り返される。行きつく結果は同じなのだが、元はパーティの存続の為に、何度も苦言を告げ続けてきた。

『今日こそは絶対に、阻止して見せる！』

ハルは、元が指差す獣に一警しただけで、ザツツケルオンの特徴を羅列し始めた。ボソボソと話す声は、カラーの雜踏に掻き消されそつな程、小さい。

「獣名は「ザツツケルオン」。

サイズは三メートルから七メートル。獰猛且つ類いまれな体力と、防御に使われる長く太い尻尾、発達した嗅覚・・・と。嗅覚は面倒か。少し厄介かもしだんな。接近戦は、要注意だ。

後は・・・爪はどんな岩も碎ける威力を持ち、更に威力を増大させる長い腕。その為攻撃は、大きく腕を振り落す、か・・・恐らく敵を一撃で仕留める方法に限られると思う。体格から予測すると、

攻撃パターンも単純な筈だ。

しかも清い光に弱い。「癒しの光」で攻撃力及び体力を一五%前後減少させる事が出来る。まあ、二十分位の効果しかないが、その時間が勝負だ

「ちょっと、ちょっと？」

元が間髪入れずに、苦情を告げた。

「何、受ける気満々で話進めてんだよ！…」

「それに・・・」

ハルは、リストを見ながら言葉を繋げる。

「ここから東一〇キロ地点に居るが、東南に向かつて移動を続けている」

自分の額に指をかざし、乱雑に本を捲る様な仕草をした。その表情は真剣そのもので、元は「ググツ」そう言葉を飲み込んだ。

「こいつの目的は、恐らくその先にある町だ。一直線に進んでいる。恐らく後一日程度で、町に到着するだろう。千人近い人口の町だ。襲われる様な事があれば、甚大な被害が出る」

ハルの言葉には、この依頼を無視出来ない緊迫感を纏っている。

『いやいやいや、このパーティを守るのは俺だ。死んだら元も子もねえんだからな！』

「う・・・。時間はあまりない、か。で、でもよ、随分育つてゐるみたいじゃねえか？ 僕達の手には余るぜ。頑張ればどうにかなる、なんて世界じゃないんだからせ」

元の言葉を尻目に、ハルはリストに手を翳し「我は願う」そう呟くと、リストが青白く輝いた。これで契約締結だ。隣で、「ちょ、だから！ 僕の意見も、ちつたあ聞け！」元が不機嫌そうにブツブツ文句を言つているが、全く氣にも留めず、リストから顔を上げようともしない。

その時、隣の席から楽しそうな声が響いてきた。

「ねえ、こっちにしようよ。このタイプだつたらこの前、コツ捆

んだしさ！ 絶対行けるつて！！

「B、かあ・・・ちょっと不安。ほら見てよ、意外とスピードが速いじゃん？ 僕ら、すばしっこいのちょっと苦手じゃない？」元はチラリと隣のリストに目を移した。そのパーティが指差しているのは、正に自分が契約を狙っていた獣だ。元達にとつては、問題無く倒せるレベルの獣なのに、容易に片がつくのに・・・そう思つと、二人に向かつて自然と言葉が出た。

「大丈夫じゃねえ？ スピードがあるつて言つても、広範囲で意識を広げるタイプじゃねえし。前からの攻撃だけ注意しておけば、行けんじゃねえ？」

元は頬杖をつきながら、あたかも知り合いの様な顔でパーティを見ている。元の言葉に、顔を上げた一人を見て、元は驚きの声を上げた。

「双子？」

知り合い同士でこの世界に訪れるエンダなんて、聞いた事がない。隣のテーブルには、双子と四十代前半位の男女が座っていた。ぱつと見、親子の様なパーティだ。獣の選別は双子に任せているのか、干し肉を肴に酒を飲んでいる。

「双子じゃないよ」 × 2

「似てるけどね」 × 2

息もぴつたりな上に、人懐こい笑顔もそつくりな一人だ。ここまで似ていて、兄弟じゃないなんて有り得るのだろうか？ 十代半ばの風貌に、クリクリとした栗毛が良く似合つている。

「へえ、他人の空似か？ めちゃ似てんなあ」

元の感心する様な言葉に、ハルがチラリと顔を上げて、暫し一人を見入つている。二人は互いに顔を見合わせ、ニッコリと笑つた。

「だよね。自分達でもそう思うよ」 × 2

言い合わせた様に、同じ言葉を発する二人は、更に言葉を続ける。あまりにも息がぴつたりで、スピーカーから声が出ている様に聞こえる。

「僕達、出会った瞬間に運命を感じたんだ。互いが欠けていた一部なんだって、ビックと来たよ。ね！」×2

「へええ～面白いなあ。何々？ 職業も一緒なの？」

興味本位を全面に押し出しながら、元は楽しそうに問うた。

「そんな訳ないでしょ～四人のパーティーで、二人も同じ職業なんていらないよ」

酒に酔つた紅い顔で、女性が話に入ってきた。社交的な元は、自然と他のエンダ達と会話を交わす事が多い（ハルとは全くと言つてい程正反対だった）。

「僕はマジックカーだよ」

「僕はブックマスターだ」

「へえ、ブックマスター？ 珍しいな。マジックカーやヒーラーと違つて、攻撃と癒しが使えるって本当？ 獣を召喚するんだろう？」

便利だよなあ」

「まあね、でもレベルが低い内は中々ね。足手纏いになる事もしばしばさ」

そう言つと、ブックマスターは小さく肩を上げた。「マジックカー」とは魔法使いの事だ。精靈と契約を交わし、攻撃魔法を使用する事が出来る。戦士とマジックカー、そしてヒーラーはパーティーに必ず居る職業だった。

反して「ブックマスター」は、かなり希少な職業といえる。魔法書から様々な能力を有する獣を召喚する事が出来が、レベルが低いうちは、召喚出来る獣も限られて居る上に、かなりの魔法力を消耗するらしい。ブックマスターが海を越えるのは、容易な事ではないと言われていた。

「なあ～に言つてんの？ ロックテつてば、自分の価値をホント分かつてないんだから！ 四八の召喚獣が使えるなんて凄いんだからね！ 更にレベルが上がれば、凄い事になるよ。今は我慢さ。それまでは僕が君を守るよ！」

「ジョッショ～・・・ありがとう。君にはいつも助けてもらつてい

て・・・いつか君の役に立ちたいよ！」

「それは僕のセリフさ、君と一緒に狩りをする事が、僕の生きがいなんだ。君と居れば、僕はもっと強くなれる」

キラキラとした瞳で、互いを見つめる一人に、元は首を捻りながらも感動の声を発した。仲間意識が強い奴は「まんと居るが、ここまで認め合っている奴らは珍しい。

「仲良いなあ」

「こいつらはねえ、自分大好き人間だからね。だからお互いの事が、命の次大事なのさ」

親父が一人を指差し笑い、女性もケラケラと笑っている。「ははは、そつくりだつて言つてもそんな馬鹿な・・・」そう笑う元の隣で、二人は同時に舌を出した。どうも冗談ではなさそうだ。

「じゃ、契約するよ！」

ジョッショウの言葉に、ロッテが頷くと青白い光が周囲を照らす。

「あ～あ、良いなあ・・・」

諦めきれない元の言葉に、双子を見ていたハルが手厳しくピシヤリと言つた。

「誰かがやらねばならんだろう。それが我々というだけの話だ。こいつには、既に何組かのエンダ達がやられている。だからこんな危機的状況でも、野放しだ。時間が無い。選好みしている場合か。そんな下級（元が選んだ獣を指差し）、そいつらに任せておけばいい」

【下級を狙う、そいつら】と呼ばれた二人は、苦笑いを浮かべている。姿形は幼いが大人の対応に、元は内心ホッと胸を撫で下ろした。ハルの無神経な物言いは、いつも元をハラハラさせた。気の強そうな親父と女性は、ハルの小さな声が聞こえなかつたらしく、キヨトンとしている。

「う～選好みじやねえ！ 死んだら元も子もない一つの…！ 能力に合つた獣を選択するのは、ここで生きてく上で死活問題だろ？」

そう訴えられた言葉に、ハルは真っ直ぐな視線を元に投げ、

「だつたら自分達がその能力者になればいい事だ」

それだけ言つと、持ち込んだ本を広げ、目を落とした。

「…………！ だから、その能力を得る前に死んだら意味ないじゃんか！！ 既に何組かの・一組になつたらどうすんの！？」

元の絶叫に、ロツテとジョッショウがリストを覗き込み、驚きの声を上げた。

「ひやー、ほぼう級じやん。リストに上がって随分経つのに、未だ倒されていない獸だよ？ お兄さん達、そんなに強いの！？」

「いやお兄さんって、俺は元だ・・・つて、そこじゃなくて。弱くはねえけど、A、はもしもの時が・・・」

「この世界の契約は、獸を仕留めて宝玉を持ち帰れば任務完了」となる。

逆に、依頼カード（依頼を受けたら発行されるカードで、持つていると獸の情報が更新される）を破棄するか、受けたエンダが死ぬかもしくは二十日以内に仕留めなければ自動的に破棄される。怖いのは、契約破棄を続けると契約出来る狩りが限定される様になる事だ。その為、エンダは慎重に成らざるを得ない。

「既に契約は結ばれた。今更文句を言つな」

当然の様に言い放つハルに、

「今更あー？？ いやいやいやいやー！ 契約する前に、散々反対しましたケド？？？？」

ハルの有無を言わせぬ絶対的な物言いに、隣のパーティ全員が【御愁傷様・・・】そんな表情を浮かべている。皆の表情を横目に、元はギリギリと歯を鳴らした。それでも元は、効果の無い説教を言い続け、そして言いつくすとガックリと肩を落とした。この雑踏の中、ハルだけが隔離された世界に居るようだ、元はスルーされ続けた。

『今回も無駄に終わった・・・』

「元、終わった？ だったらさ、この獣の対策を一緒に考えてよ！」

ジョッショウの陽気な声に、元は更にガクリと肩を落としたが、「ちよつと、待つて」そう言うと元は席を立つた。ネビールを注文するため、カウンターにドカドカと向かう。

夜が更けると、カラーは更に異色な空気をはらみ始める。興奮と安堵そして不安。様々な想いが交差する空氣に、エンダは飲み食い笑い語り合つのだ。

「・・・行くのはいいんだよ。行くのはさ。獣は絶対に俺が倒すし。だって・・・おめえまた無茶するだろ？」

なみなみと注がれたジョッキを傾けながら、小さな声でボソリと呟く。そして一度ハルに目を向けると、フツと目を伏せた。

ハルが前髪に落ちた雫を払つた。こんな小さな体のビニー、獣を前にしても怯む事の無い、強固な精神があるのでどう・・・百戦錬磨の戦士でさえ、獣を前にすると一瞬恐怖に襲われるというのに。

ハルの能力は、他のエンダ達のそれとは全く違う。戦士とヒーシャの根本的な違いだけではない。もつと根底の部分で大きな違いがあるのだ。ヒーシャの事は全く分からないが、ハルの術者としての能力は、かなり高いのではないかと感じている。他のエンダと旅をしたのは初期の頃だけだが、魔法に時々鳥肌が立つ時があるのだ。何て言うのだろうか・・・戦士であれば、獣が切られた事に気づかず絶命する様な、一片の無駄がない美しさというのだろうか。正直、筋肉馬鹿の元には、回復魔法に優れているハルの能力は大変心強い。しかも、倒すべき獣の殆どが、闇に属する類いの為、ハルの補助魔法は有効に機能した。

『術の発動時間の短さ、ましてや術の影響力も相当・・・てか、センスがいいんだよな』

しかしこれは経験を積めばどうにでも成る話かもしれないでの、特段珍しい事ではないかも知れない。

他のエンダ達と絶対的に違うのは、獣を感知する能力を備えている事だ。三キロ地点では方向を、一キロ以内になると、その性質と大体のレベルまでを感じ取る事が出来るらしい。神出鬼没に出現する獣を感知するのだから、この広い世界において驚くべき能力といえる。

加えてその記憶力だ。村や町に立ち寄る度に、終日書物所に籠る。そうやって得た知識を、額の前で本をめくる仕種で、情報を呼び出す事が出来るらしい。胡散臭い話だが、光が浮き出るように文字が見えるのだと云う。そこに、自分の経験を上書きしていると言うの

だ。

しかし、そんな特殊な能力故か、はたまた強くなりたい一心からか、如何せん無理をし過ぎる。息も絶え絶え、町に駆け込む事も多く、何度も死にかけたか分からない。それでも、獣を前に引く事を知らないハルを見捨てることが出来ず、二人は何とか受けた依頼を片づけていった。

『いつになつたら、心穏やかに暮らせるようになるんだろう』

元は目の前の獣を見据えながら、声に成らない嘆きを吐く。ハルと一緒に狩りを続ければ、いつか絶対に命を落とす・・・そう思うのに、気がついたら別の狩りに向かつてギヴソンを走らせていく。

「気付かれた」

ザツッケルオの異常な興奮を感じ取ったハルが、ボソリと呟いた。嗅覚が発達しているというのは伊達じゃないらしい。気付かれた・・・そんな状況でも、ハルは決して動じたりしない。死にかけていても、レベルが低い敵の前でも、ハルは何も変わらなかつた。

「（ちつたー、焦りやがれ！）チツ」

元はギヴソンから飛び降り、手綱を離した。縛り付けて、戦いに巻き込まれないようにする為だ。ギヴソンは毛色の違う獣から一目散に離れ、姿が見えなくなつた。戦えない事もないだろうが、獣同士が戦う時は、喰うか食われるか、その時だけだ。人間の為に、そんな危険を冒す筈はない。

『こいつにも、これだけの危機回避能力があれば・・・』

元は嫌みと心配が入り乱れる感情で、ハルを見た。ハルはじつと胸に手を当ててタロのぬくもりを確かめている。服の隙間からタロが鼻だけを出している姿は、何とも力が抜ける様な可愛さがある。

「もう少し、我慢してね」

タロに向かつて、優しくハルが呟いた。

クン・・・

ハルの気遣いに答えるように、タロは鼻を鳴らし地面に降り立ち、安全な場所を目指し駆けて行く。本当は一時も離れたくない筈なのに、ハルの足手纏いにならない様に場所を離れるのだ。タロの（元には見せない）聞き分けの良さと、ハルの（元には見せない）優しい言葉に、

「その優しさ、少し位は俺にも向けてくれよ」

言つても嘆いても無駄な言葉を、ブツブツと吐いてみたりする。

「ゴアッ

その時、元達の直ぐ真横を、直径二メートルの大木が通り過ぎた。風圧で二人のバトルドレスが揺れる。一人がスッと目を向けると、ザツツケルオンが直ぐそこまで迫っていた。

「ふうん、熊だな」

元の言葉通り、姿形は一足歩行をする熊そのものだ。深緑の瞳は、執拗に元達を見下ろしている。大きく体を左右上下に揺らしながら、時々咳きに似た唸り声を上げた。村を襲つた興奮が蘇つたのか、瞳孔を異様に開かせ、流れ落ちる涎と鼻息を荒くする様は、殺戮 자체が快楽・・・今まで何度も見てきた光景に、「はつ、楽しんでやがる」元が苦々しく吐き捨てる。

犠牲になつた民を思うと、いつもこの瞬間は堪らない気持ちに陥るのだ。

元は背中からスルリと剣を抜き、獣に向かつて構えた。自分の身丈程ある剣が、豪雨の中鈍く光り輝く。長期戦は不利だというハルの言葉を思い返しながら、ハルが仕掛けるタイミングをジッと待つ。ザツと一步、獣が近づいたその時、周囲に低い詠唱が響き渡つた。

「エルザ スロウ 届け 清い光」

詠唱が終わるや否や、ハルの掌から呪文を携えた光の魔法陣が出現した。波打つ様な魔法陣の出現を導くがの如く、周囲に荘厳な歌が木靈する。空気が震えた・・・そう感じたのと同時に、魔法陣がハルを離れ、勢いよく上昇を始めた。魔法陣は大気を巻き込みながら、獣のサイズまで急激に広がつたかと思うと、一気に振り落とされた。ザツツケルオンが光輝く魔法陣に包まれた瞬間、その巨体が大きく揺れる。

ギャガガガアア！

空気を揺らす雄叫びを上げ、両手を広げ天を仰ぐ。余程の苦痛なのか、目の焦点は定まつていない。しかし元来の闘争本能から、覚束ない足取りで攻撃を仕掛けてきた。清い光で動きが鈍いとはいえ、やはり攻撃力は半端がない。長い腕の遠心力で、鋭い爪を左右上下と振り落としてくる。逸れた攻撃は、大岩を真つ二つに打ち碎いた。しかしハルの言葉通り、単純攻撃で軌道が読みやすい。元は、間合いを取りながら、獣の太い肩を目掛けて大剣を振り落した。

ガチン！！

「固え～！！」

金属音が周囲に響き渡る。剣が鋼鉄の皮膚によつて、弾き返された。腕全体に伝わる衝撃に、思わず剣を持ち替えて痺れた手を振つた。「力比べか・・・」そう呟きながら、元はスッと剣を構える。

ドン

次の瞬間、元は獣の目の前だった。降りしきる雨の中に、元の残像がぼんやりと残る。スピードと破壊力、元の一糸乱れぬ怒涛の攻撃が、ザツツケルオンを捉えた。

ガキン！ガキン！

しかし、固い皮膚に阻まれて致命傷を負わせる事が出来ない。その上、嗅覚が発達している為か、元の攻撃に対し絶妙な防御力を發揮してくれる。

「くつ！」

元は気を練り込む為に、剣先に集中した瞬間、

「やべっ！」

元の右目に、ザツツケルオンの長くて太い尻尾が見えた。そう気が付いた時には、時既に遅く、鋭い衝撃が元の右脇を襲う。痛恨の一撃は、元をそのまま真横に弾き飛ばした。木々を数本なぎ倒し、大木に全身から打ち付けられると、衝撃で水滴が豪雨の様に降り注ぐ。

「がはあ・・・

「！」

思わずハルは、元に目線を移した。一時の間の後、なぎ倒された木

々の間から、倒れたままの姿で、よろよろと片手が上がった。血に染まつた唾を吐きだしながら、横腹に食い込む激痛に、

「い・・、てえ。なんだよ・・・。尻尾、防御どころじゃなくねえ？ 何が単純な奴だって？」

恨めしそうにハルが居る方向に目を向ける。そんな元の言葉など聞く筈も無いが、

「ふむ、新しい情報だな。上書きしておいつ」

ハルは、抑揚の無い声で呟くと、獸に視線を移した。

ギャギャギャア

ザツツケルオンは、田の前の小さい生き物に視線を落とした。口バエの様に纏わりつく生き物は、たつたの一撃で立ち上がれない程のダメージを受けている。どちらから先に片づけようかと迷いながら、ハルに目線を移した。

『これは小さすぎて面白くない。こいつは最後の楽しみにしよう。遊べる玩具がノコノコ出てきたんだ。恐怖に引き攣る顔が見たい。さっきの生き物は、動けない程のダメージだ。いたぶりながら、ゆっくりと遊んでやる』

そう判断すると、元が倒れている方向に体を翻した。

獣の判断を横目に、ハルはボソリと呪文を唱える。

「ルペオセイン届け癒しの泉」

ハルの足元より魔方陣が浮かび上がり、倒れている元の真上から光の泉が降り注いだ。光の泉を全身に受け、元は飛び跳ねるように立上がり、ハルに向かつて声を掛けた。

「いよっしゃー！ 全回復！！ ハル～サンキュウウ」

先程までの激痛が、嘘みみたいに無くなっている。ヒーシャの魔法、癒しの効果は絶大だ。

元に向かつて歩みを進めていたザツツケルオンは、一瞬目を見開いた。ダメージを多少なりとも与えたはずの生き物が、勢いよく立ち上がり、しかも負わせた傷の後遺症を微塵も感じさせないとは。目の前の状況を怪しく光る眼で見届け、ハルに向けてグルリと体を反転させた。

自分の動きを封じ込めた上、仲間を回復させる魔法が使える人間・・・ハルを見据え、ギラリと深緑の眼が光ると、ゆっくりと歩み始

めた。

『攻撃力のある生き物を叩きのめしても、何度も起き上がりつて来る。それは、この小さい生き物のせいだ。攻撃力が強い生き物は、こいつを殺してからゆっくり相手にすればいい』

ザツツケルオンは、緑の目をギラギラさせながら、一步一歩ハルに近づいていく。自分の力でどうにでもなる命が目の前に居る・・・。獸は興奮に身を震わせた。

「ちよお、ちよ、ちよっと待て！ お前の相手は俺だ！！！」  
ハルを攻撃対象に変えたザツツケルオンに、元は叫びながら駆け出す。

「ふむ・・・こいつ魔法を理解している。頭が良いな」

今や眼前に立ちはだかるザツツケルオンを前にして、ハルは冷静に判断した。力だけではない、この感の良さに何組ものエンダが犠牲になつたのだ。エンダと戦い生き残る度に、獸は強くなり手強くなる。自分達で狩りを終わらせなければ、世界の脅威は増すばかりだ。

「それでいい」

ザツツケルオンの判断に、ハルは嬉しそうに咳く。五メートル級の獸は、下から見上げると大木の様だ。こんな獸と対峙する事になると、一年前は思いもよらなかつた。・・・命を摘む事に、躊躇していた自分が居たのに。

『一年か・・・早いものだ』

その刹那、  
ギヤーガガツ

ザツツケルオンが地の底から響くような雄叫びを上げ、ギラリとハルを見据えると、長く太い腕を振り落した。自分にとつては、「ミ程度の生き物だ。この一撃で決まる・・・そう判断を下す。ハルの栗色の瞳に、ザツツケルオンの鋭い爪がくつきりと映つた。

「ハ、ハルー！！」

『仕留めた！…  
ザツシユ！』

太い爪が、地面に深く突き刺さる。地面をえぐる程の一撃に、打ち付ける雨の中、獣はニヤリと妖しく笑った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8274x/>

---

エンダ

2011年11月30日10時47分発行